

第 1 2 章

パリークシット皇帝の誕生

第 1 節

श्रीशौनक उवाच

अश्वत्थाम्नोपसृष्टेन ब्रह्मशीर्ष्णोरुतेजसा ।
उत्तराया हतो गर्भ ईशेनाजीवितः पुनः ॥ १ ॥

シャウナカ ウヴァーチャ
śaunaka uvāca

アシュヴァッタハーナムノースリシュテナー
aśvatthāmnopasṛṣṭena

ブラフマ・シールシュノール・テージャサー
brahma-śīrṣṇoru-tejasā

ウッタラーヤー ハトー ガルバハ
uttarāyā hato garbha

イーシェナージーヴィタハ プナハ
īśenājīvitaḥ punaḥ

śaunakaḥ uvāca—聖者シャウナカが言った; *aśvatthāmna*—アシュヴァッターマー（ドゥローナの子息）; *upasṛṣṭena*—～の発射によって; *brahma-śīrṣṇā*—無敵の武器、ブラフマーストラ; *uru-tejasā*—高い温度によって; *uttarāyāḥ*—ウッタラー（パリークシットの母）の; *hataḥ*—危険にさらされて; *garbhaḥ*—子宮; *īśena*—至高主によって; *ājīvitaḥ*—蘇った; *punaḥ*—再び。

聖者シャウナカが言う。「マハーラージャ・パリークシットの母ウッタラーの子宮は、アシュヴァッターマーが放った恐ろしくかつ無敵の武器ブラフマーストラによって危険にさらされた。しかし、マハーラージャ・パリークシットは至高主によって救われた」

要旨解説

ナイミシャーラニヤの森に集まった聖者たちはマハーラージャ・パリークシットについてスータ・ゴースヴァーミーに尋ねましたが、その会話のなかで、ドゥローナの子息がブラフマーストラを発射したこと、アルジュナがその子息を懲罰したこと、クンティーデーヴィーが主クリシュナに祈りを捧げたこと、ビーシュマデーヴァの臨終の場にパーンダヴァ兄弟た

ちが集まったこと、ビーシュマデーヴァが主クリシュナに祈ったこと、そして主がドウヴァーラーカーに出立したことなど、さまざまな話題が語られました。また主がドウヴァーラーカーに到着したことや、そこで16,000人の妻と住んでいることなども述べられています。聖者たちは一心に耳を傾けていましたが、ここにきて、最初の話に戻ることを希望し、シャウナカ・リシが質問をしました。ここから、アシュヴァッターマーが放ったブラフマーストラの話題に戻ります。

第2節

तस्य जन्म महाबुद्धेः कर्माणि च महात्मनः ।
निधनं च यथैवासीत्स प्रेत्य गतवान् यथा ॥ २ ॥

タッシャ ジャンマ マハー・ブッデヘーハ
tasya janma mahā-buddheḥ

カルマーニ チャ マハートウマナハ
karmāṇi ca mahātmanah

ニダハナンム チャ ヤタハイヴァーシートウ
nidhanam ca yathaiivāsīt

サ プレーチャ ガタヴァーン ヤタハー
sa pretya gatavān yathā

tasya—彼（マハーラージャ・パリークシット）の; *janma*—誕生; *mahā-buddheḥ*—すばらしい知性の; *karmāṇi*—活動; *ca*—もまた; *mahā-ātmanah*—その偉大な献愛者の; *nidhanam*—他界; *ca*—もまた; *yathā*—そうだったように; *eva*—確かに; *āsīt*—起こった; *sah*—彼; *pretya*—死後の運命; *gatavān*—達した; *yathā*—そうだったように。

高い知性をそなえ、偉大な献愛者であるこの偉大な皇帝が、なぜウッターラの胎内に生をうけたのでしょうか。また、どのように皇帝に死が訪れ、そして死後なにを達成したのでしょうか。

要旨解説

ハスティナープラ（現在のデリー）の王は世界を統治する皇帝でもあり、少なくともパリークシット皇帝の時代までその体制は続いていました。マハーラージャ・パリークシットは母親の胎内にいたときに主によって救われていますから、ブラーフマナの息子の邪悪な呪いによる早すぎる死からも救われていたはずですが。マハーラージャ・パリークシットが権力の座についたときからカリ時代がはじまったために、この時代の最初の不吉な兆しは、マハー

ラージャ・パリークシットという高い知性をそなえ、そして献身的な王が呪われるという出来事からはじまりました。国王は無力な市民を守る立場にあり、かれらの幸福、平和、繁栄は国王の肩にかかっています。不運なことに、墮落したカリ時代の刺激によって悲運のブラーフマナの子が、清廉潔白なマハーラージャ・パリークシットを呪うことに使われ、その結果として王は7日間に死を迎える準備をしなくてはなりませんでした。マハーラージャ・パリークシットはヴィシュヌに守られることでよく知られた人物であり、ブラーフマナの息子の不当な呪いを受けたとき、主の慈悲にすがって救われることもできたのですが、純粋な献愛者だったかれはそう望みませんでした。純粋な献愛者は必要以上の恩寵を主に求めることはしません。マハーラージャ・パリークシットは、だれの目にも明らかだったように、ブラーフマナの息子の呪いが不当であることを知っていましたが、その呪いを打ちけそうとは望みませんでした。カリ時代がすでに始まっていたこと、そしてこの時代の最初の兆候、すなわち優れた能力を持つブラーフマナ社会が墮落するという兆しがすでに始まっていたことを知っていたからです。時の自然な流れを妨げるつもりはなかったし、死を喜んで、そして適切に迎える準備をしたのでした。幸運なことに、王には死の準備をする7日間の猶予が与えられ、その時間を、偉大な聖者で献愛者であるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとの交流に正しく使ったのでした。

第3節

तदिदं श्रोतुमिच्छामो गदितुं यदि मन्यसे ।
 ब्रूहि नः श्रद्धधानानां यस्य ज्ञानमदाच्छुकः ॥ ३ ॥

タドウ イダナム シュロートウンム イツチャーモー
tad idam śrotum icchāmo

ガデイトウンム ヤディ マニヤセー
gaditum yadi manyase

ブルーヒ ナハ シュラッダダハーナーナナム
brūhi naḥ śraddadhānānām

ヤッシャ ギヤーナム アダーチ チュカハ
yasya jñānam adāc chukaḥ

tat—すべて; *idam*—これ; *śrotum*—聞くこと; *icchāmaḥ*—全員が望んでいる; *gaditum*—語ること; *yadi*—もし; *manyase*—あなたが考える; *brūhi*—どうぞ話してください; *naḥ*—私たち; *śraddadhānānām*—深い敬意を表わしている者たち; *yasya*—～である者; *jñānam*—超越的知識; *adāt*—伝えた; *śukaḥ*—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー。

私たちは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが超越的知識を授けたその人物（マハーラージャ・パリークシット）について、心から敬意とともに傾聴したいと思っています。どうか、このことについてお話しください。

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、余命7日のマハーラージャ・パリークシットに超越的知識を授け、マハーラージャ・パリークシットは熱心な生徒としてその知識を正しく傾聴しました。『シュリーマド・バーガヴァタム』に対するそのような真摯な傾聴と吟唱の効果は、聞く者も語る者も同じように授かることができます。双方が恩恵を授かるのです。『シュリーマド・バーガヴァタム』で述べられている献愛奉仕の超越的な9つの方法のなかで、全部、あるいはいくつか、あるいは1つだけでも、適切に実践されれば同じ恩恵が得られます。マハーラージャ・パリークシットとシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、この唱え、そして聞くという大切な方法を真剣に実践したからこそ、称讃に値するその試みを成就させることができました。超越的悟りは、そのような真剣な傾聴と吟唱で得られるものであり、そうでなければ成功しません。いまのカリ時代では、精神指導者と弟子についておかしな説明があります。師は、自分が作りだした電流を自分の精神的力を弟子のなかに流しこみ、弟子はそのショックを感じる。弟子は意識を失い、師は蓄えていたいわゆる精神的富を失ったことを嘆いて涙にくれる——まことしやかなこのような話を哀れな一般人は信じこむのです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとその弟子のマハーラージャ・パリークシットのあいだにはありえない話です。この聖者は篤い信仰心から『シュリーマド・バーガヴァタム』を吟唱し、この偉大な王は正しい心構えで傾聴しました。王は師から電気ショックを感じたわけでもなく、師から知識を授かって気絶したわけでもありません。くれぐれも、ヴェーダ知識を騙る偽者代表者の権威のない喧伝の犠牲になってはなりません。ナイミシャラニヤの聖者たちは深い敬意からパリークシット王について聞きましたが、それは王がシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから熱心に聞くという方法で知識を授かったからです。正しい師から熱心に聞くことが、唯一、超越的知識を授かる方法です。奇跡的な効果を得ようとする医学まがいの、あるいはオカルト神秘主義は必要ありません。方法はとてもかんたんです、しかし、誠実な心を持つ人だけが望ましい結果を授かることができます。

第4節

सूत उवाच

अपीपलद्धर्मराजः पितृवद् रञ्जयन् प्रजाः ।

निःस्पृहः सर्वकामेभ्यः कृष्णपादानुसेवया ॥ ४ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

アピーパラドゥ ダハルマ・ラージャハ
apīpalad dharma-rājah

ピトゥリヴァドゥ ランジャヤン プラジャーハ
pitṛvad rañjayan prajāḥ

ニフスプリハハ サルヴァ・カーメービハヤハ
niḥspṛhaḥ sarva-kāmebhyaḥ

クリシュナ・パーダーヌセヴァヤー
kṛṣṇa-pādānusevayā

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *apīpalat*—治めた; *dharma-rājah*—ユディシュティラ王; *pitṛ-vat*—まさに彼の父親のように; *rañjayan*—心地良い; *prajāḥ*—誕生した者たち誰もが; *niḥspṛhaḥ*—個人的野心を持たない; *sarva*—すべて; *kāmebhyaḥ*—感覚満足から; *kṛṣṇa-pāda*—主シュリー・クリシュナの蓮華の御足; *anusevayā*—絶え間ない奉仕によって。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「ユディシュティラ王は、だれをも寛大に支えながら国を統治していた。まさに自分の父親と同じような存在だった。個人的野心もなく、感覚を満たそうとする思いは心になかった。それは、王が主シュリー・クリシュナの蓮華に御足につねに仕えていたからである」

要旨解説

私は序章で、「世界中の苦しむ人々が幸福になれるように、クリシュナの科学が世に広められなくてはなりません。だからこそ私たち献愛者はすべての国の読者に向かって、自分自身の幸せのために、社会の福利のために、世界中の人々の幸せのために、クリシュナの科学を学んでいただくようひとえにお願いするものです」と書きました。この節でも、徳の権化でもあるマハーラーヂ・ユディシュティラの例によってそのことが確証されています。インドでは人々がラーマ・ラージャ (Rāma-rājya) を求めています。人格主神が理想的な王だからであり、またインドに降誕した他の王や皇帝は、地球に誕生した全生物の繁栄のために世界の運命を支配していたからです。この節では *prajāḥ* (プラジャーハ) という言葉が重要です。この語源の意味は「誕生するもの」です。地球には水生動物から完璧な人類まで数多くの生物種がありますが、どれもプラジャー (*prajā*) と知られています。この宇宙の創造者である主ブラフマーは誕生した者たちすべての祖父であるため、プラジャーパティ (*prajāpati*) として知られています。このように、プラジャーは現在使われている意味よりも広い意味で使われています。王は、水生動物、植物、木、爬虫類、鳥類、動物、人間など、すべての生

物を代表しています。すべての生物が至高主の部分体であり（『バガヴァッド・ギーター』第14章・第4節）、王は至高主の代表者であることから、そのすべての生物を正しく守るという責任があります。しかしこれは、高等な動物は大切にされるいっぽうで下等動物はまったく守られていないという、現代の混乱しきった政治体制では実行されていません。これは、クリシュナの科学を知る人物だけから学べる偉大な科学なのです。その科学を知ることによって私たちは世界でもっとも完璧な人物になることができ、またこの科学の知識がなければ、いわゆる大学教育で得たいっさいの資格や博士号も無駄・無用になります。マハーラーヂ・ユディシュティラはこのクリシュナの科学に精通していました。それはユディシュティラ王がこの科学を修養しつづけたことで、すなわち主クリシュナへの献愛奉仕をつづけたことで、国を統治する資質を得た、とこの節で言われていることからわかります。ときには父親が子どもに冷たい態度をとることがありますが、そのために父親の資格が失われるわけではありません。父親はいつでも父親です。子どものためになることをいつも思っているからです。自分の子どもすべてが自分よりも優れた人間になってほしい、と考えています。ですから、徳の権化でもあるマハーラーヂ・ユディシュティラのような王は、国内のだれもが、とくに高い意識をそなえた人物が物質存在の些細な物事から解放されるように、主クリシュナの献愛者になることを願っています。ユディシュティラ王の国政のモットーは市民たち全員の利益に結びついていました。徳の権化であるかれは、なにがかれらの利益なのかをよく知っていたからです。ラクシャシ (rākṣasi) という邪悪な感覚満足の原則に従ったのではなく、ただしい原則にもとづいて国を治めていたのです。理想的な王だったユディシュティラ王には、個人的や野心も、そして感覚満足の願いもいっさいありませんでした。感覚はすべて、至高主への愛情奉仕のために使われていたし、その奉仕には、完全全体者の部分体である生命体たちに対する奉仕も含まれていたからです。全体者への奉仕を考えずに、部分体への奉仕だけに奔走している人々は、時間と力を無駄にしているだけであり、それは木の根に水を注がずに葉だけに水を注いでいる行為と同じです。水が根に注がれれば、葉も完全に元気になります。葉だけに注がれれば木全体の力が失われていきます。ですから、マハーラーヂ・ユディシュティラはいつでも主に奉仕をしており、主の部分体たちも、その行き届いた統治によって、現世でも来世でも、あらゆる面で快適な生活が約束されていました。それが、国を統治する完璧な方法なのです。

第5節

सम्पदः क्रत्वो लोका महिषी भ्रातरो मही ।

जम्बूद्वीपाधिपत्यं च यशश्च त्रिदिवं गतम् ॥ ५ ॥

サンパダハ クラタヴォー ローカー
sampadaḥ kratavo lokā

マヒシー プラタロー マヒー
mahiṣī bhrātaro mahī

ジャンブードウヴィーパーデヒパチャム チャ
jambūdvīpādhipatyam ca

ヤシャシュ チャ トウリ・ディヴァナム ガタム
yaśaś ca tri-divaṁ gatam

sampadaḥ—富; *kratavaḥ*—供儀祭; *lokāḥ*—未来の目的地; *mahiṣī*—女王たち; *bhrātaraḥ*—兄弟達; *mahī*—地球; *jambū-dvīpa*—地球あるいは私たちの住む惑星; *ādhipatyam*—統治権; *ca*—もまた; *yaśaḥ*—名声; *ca*—そして; *tri-divam*—天国の惑星; *gatam*—〜に広がる。

マハーラーヂ・ユディシュティラの財産、優れた目的地に到達するための供儀祭、女王、堅固な信念を持つ兄弟たち、広大な領土、地球上の統治権、名声などにまつわる知らせが、天国の惑星にでさえ届いた。

要旨解説

裕福で偉大な人物の名前や名声だけが世に知れわたるものですが、マハーラーヂ・ユディシュティラの名前と名声は高位の惑星にでさえ届いていました。それは、ユディシュティラ王の優れた統治、財産、ドウラウパディーという栄光に満ちた妻、兄弟であるビーマやアルジュナの力、そしてジャンブードウヴィーパという世界に広がる堅実な統治力ゆえのことです。この節の *lokāḥ* (ローカーハ) は重要です。物質・精神両世界にはさまざまなローカ・高位の惑星が散在しています。『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第25節) で述べられているように、現世での活動の力によってその惑星に行くことができます。強引に入ることはできません。大気圏外を数千マイルしか飛べないような乗り物を造ったちっぽけな科学者や技術者たちに、入ることは許されないのです。科学者たちの方法では高位の惑星に到達することはできません。供儀祭や奉仕をすることで、そのような幸福な惑星に入ることのできる資格をそなえなくてはならないのです。いつも罪な生活をしている人々は、物質存在の苦悩のなかでさらに苦しむために動物の生活に墮落するしかなく、それは『バガヴァッド・ギーター』(第16章・第19節) でも言われています。マハーラーヂ・ユディシュティラの気質や優れた供儀祭は崇高で徳高く、高位の天国の惑星の住人たちでさえ、ユディシュティラ王を同士として迎える準備をしていたのでした。

第6節

किं ते कामाः सुरस्पर्हा मुकुन्दमनसो द्विजाः ।
अधिजहुर्मुदं राज्ञः क्षुधितस्य यथेतरे ॥ ६ ॥

キンム テー カーマーハ スラ・スパールハー
kim te kāmāḥ sura-spārhā

ムクンダ・マナソー ドウヴィジャーハ
mukunda-manaso dvijāḥ

アデヒジャフルル ムダンム ラーギヤハ
adhijahrur mudam rājñāḥ

クシュデヒタツシャ ヤテヘータレー
kṣudhitasya yathetare

kim—～のために; *te*—それらすべて; *kāmāḥ*—感覚の楽しみを対象; *sura*—天国の住人達の; *spārhāḥ*—熱望; *mukunda-manasaḥ*—すでに神の意識である者の; *dvijāḥ*—ブラーフマナ達よ; *adhijahrur*—満足させられた; *mudam*—喜び; *rājñāḥ*—王の; *kṣudhitasya*—腹を空かせた者の; *yathā*—～であるために; *itare*—他の物事で。

ブラーフマナたちよ。王の富は人々の心を惹きつけてやまず、天国の住人たちさえ渴望したほどである。しかし王は、主への奉仕に没頭していたため、その奉仕以外に王の心を満たすことのできるものはなにもなかった。

要旨解説

生命体を満足させるものには2つあります。物質的なものに心を奪われている人は、感覚満足だけに満足しますが、物質の様式の条件に縛られていない人は、主を満足させるための愛情奉仕だけで満足します。これは、生命体は本来仕える者であり、仕えられる者ではない、という事実を物語っています。物質界の力という条件に幻惑されていれば、自分は奉仕を受ける側にいると錯覚しますが、じっさいはそうではありません。欲情、望み、怒り、貪欲、うぬぼれ、狂気、偏屈といった感覚の召使いになっているのです。精神的知識を達成して正しい感覚をそなえた人は、自分は物質界の主人ではなく、感覚の召使いだったことに気づきます。その境地に到達した人は、主への奉仕を心から願うようになり、やがて物質的な幸福に心奪われることなく、幸福に生きられるようになります。マハーラージャ・ユディシュティラは解放された魂の一人であり、そのような人物は、広大な王国、すばらしい妻、従順な兄弟、満足しきった国民、豊かな世界などにはまったく喜びを感じなくなります。純粋な献愛者には、このような恩恵はとくに強く望むわけでもないのに自然に用意されるものです。

ここで述べられている例は、まさにその状況を物語っています。腹を空かせた人を喜ばせるものは食べ物以外にありません。

全世界が空腹の生命体で満たされています。その空腹は、おいしい食べ物でも、身を守ってくれるものでも、感覚満足でもありません。それは、*精神的な環境を求める気持ち*です。人々はただ無知ゆえに、十分な食糧がないから、身を守る場所や感覚満足が得られないから、この世界は満足できるところではない、と考えます。これが幻想と言われるものです。生命体は、精神的満足を渴望しなければ、物質的な満足を渴望するようになります。しかし、愚かな指導者は、どれほど物質的に満たされていても、じつは飢えていることに気づきません。では、人々が感じている飢えや貧困とはなにを指すのでしょうか。それは精神的な食べ物、精神的なオアシス、精神的な防御、精神的な感覚の満足です。どれも至高の魂である主シュリー・クリシュナとの交流から得られるものであり、それらをじっさいに得た人々は、物質界でのいわゆる食べ物、避難場所、防御、感覚満足には、たとえ天国の住人たちが楽しんでいるものであっても、魅了されなくなります。ですから『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第16節）で言われているように、宇宙の頂点の惑星であるブラフマローカという地球では何千万年にもなる寿命が得られる場所でさえ、その飢えを満たすことはできません。そのような飢えは、生命体が不死不滅の境地に入ったときだけに満たされるものです。そこは、ブラフマローカをさえ遙かに超えた精神界で得られるものであり、献愛者に解放という超越的な喜びを授ける主ムクンダとの交流のなかで達成されます。

第7節

मातुर्गर्भगतो वीरः स तदा भृगुनन्दन ।
ददर्श पुरुषं कञ्चिद्दह्यमानोऽस्रतेजसा ॥ ७ ॥

マートウル ガルバハ・ガトー ヴィーラハ
mātur garbha-gato vīraḥ

サ タダー ブリグ・ナンダナ
sa tadā bhṛgu-nandana

ダダルシャ プルシャンム カンチドゥ
dadarśa puruṣam kañcid

ダヒヤマーノー ストラ・テージャサー
dahyamāno 'stra-tejasā

mātuḥ—母親; *garbha*—子宮; *gataḥ*—そこに置かれて; *vīraḥ*—偉大な戦士; *saḥ*—子どものパリークシット; *tadā*—その時; *bhṛgu-nandana*—ブリグの子よ; *dadarśa*—見ることができた; *puruṣam*—至高主; *kañcit*—他の誰か; *dahyamānaḥ*—焼かれる苦しみ; *astra*—ブラフマーストラ; *tejasā*—温度。

ブリダの子（シャウナカ）よ。偉大な戦士パリークシットは、母親ウッターの胎内にあって、（アシュヴァッターマーが放った）ブラフマーストラの高温に焼かれる苦しみを味わっているとき、至高主が自分に向かってくるのを見た。

要旨解説

一般的に、死んだあと、7ヶ月間昏睡状態に陥ります。生命体は、自分のカルマに応じて、父親の精子という媒体をとおして母親の胎内に入ることが許されます。これが、過去の行動にふさわしい特定の体に入る誕生の法則です。その昏睡状態から目をさましたとき、子宮内に閉じこめられている不自由さを感じ、そこから出たいと望み、時には主に解放を祈ることがあります。マハーラージャ・パリークシットは母親の胎内にいたとき、アシュヴァッターマーが放ったブラフマーストラに襲われ、焼けつくような熱を感じました。しかし主はすぐに、献愛者だったその子を守るために全能の力で子宮内に現われ、そしてその子・パリークシットは、だれかが自分を救いに近づいてくるのを見ました。そのような無力な状況にあったパリークシットでしたが、生来そなえている偉大な兵士の気質ゆえに、耐えられない高温を耐えることができました。そしてこのために、*vīrah*（ヴィーラハ）という言葉が使われています。

第8節

अङ्गुष्ठमात्रममलं स्फुरत्पुरटमौलिनम् ।
अपीव्यदर्शनं श्यामं तडिद्वाससमच्युतम् ॥ ८ ॥

アングシュタハ・マートウランム アマランム
aṅguṣṭha-mātram amalam

スプフラトウ・プラタ・マウリナム
sphurat-purata-maulinam

アピーヴァ・ダルシャナンム シャーマナム
apīvya-darśanam śyāmam

タディドゥ ヴァーササンム アチュタンム
taḍid vāsasam acyutam

aṅguṣṭha—親指の大きさで; *mātram*—～だけ; *amalam*—超越的; *sphurat*—燃えている; *purata*—黄金; *maulinam*—王冠; *apīvya*—非常に美しい; *darśanam*—～を見て; *śyāmam*—黒みがかかった; *taḍit*—輝いている; *vāsasam*—衣服を着ている; *acyutam*—完全無欠者（主）。

その人物（主）は親指ほどの大きさしかなかったが、すべてにおいて超越的な方である。このうえなく美しく、黒みがかった完全無欠の体を持ち、燦然と輝く衣服をまとい、きらめく王冠をかぶっていた。パリークシットはこの美しい姿を見たのである。

第9節

श्रीमद्दीर्घचतुर्बाहुं तसकाञ्चनकुण्डलम् ।
क्षतजाक्षं गदापाणिमात्मनः सर्वतोदिशम् ।
परिभ्रमन्तमुल्काभां भ्रामयन्तं गदां मुहुः ॥ ९ ॥

シュリーマドゥ・ディールガハ・チャトゥル・バーフム
śrīmad-dīrgha-catur-bāhum

タプタ・カーンチャナ・クンダラム
tapta-kāñcana-kunḍalam

クシャタジャークシャンム ガダー・パーニンム
kṣatajākṣam gadā-pāṇim

アートウマナハ サルヴァトー ディシャンム
ātmanah sarvato diśam

パリブラマンタンム ウルカーバハーンム
paribhramantam ulkābhām

ブラーマヤンタンム ガダーンム ムフフ
bhrāmayantam gadām muhuḥ

śrīmat—飾られて; *dīrgha*—長期の; *catur-bāhum*—4本腕; *tapta-kāñcana*—溶けた黄金; *kunḍalam*—耳飾り; *kṣataja-akṣam*—血の色をした赤い眼; *gadā-pāṇim*—戦闘棒を持つ手; *ātmanah*—自分の; *sarvataḥ*—すべて; *diśam*—周囲; *paribhramantam*—動き回っている; *ulkābhām*—流星雨のように; *bhrāmayantam*—取り囲んでいる; *gadām*—戦闘棒; *muhuḥ*—常に。

主は4本の腕、溶けた黄金の色をした耳飾り、怒気あふれる血の色の目で飾られている。主が動くにつれ、主の戦闘棒があたかも流星雨のように主のまわりを回っている。

要旨解説

『ブラフマ・サムヒター』（第5章）では、至高主ゴヴィンダが、自らの完全分身によって宇宙の光のなかに入り、パラマートマー・至高の魂として分散させ、全生命体の心のなかに、そして原子のなかでさえ入った、と述べられています。このように、主は人智を絶する力によってあらゆる場所に遍在し、その力を使い、愛する献愛者マハーラージャ・パリ

ークシットを救うためにウッタラーの子宮のなかに入りました。主は『バガヴァッド・ギーター』（9.31）で、「わたしの献愛者は決して破滅しない」と断言しています。献愛者は主に守られているので、だれも殺すことはできませんし、主が殺そうと考えている人間はだれも救うことはできません。主はすべての力をそなえているからこそ、自分の意志で救ったり殺したりできるのです。マハーラージャ・パリークシットのような献愛者には、そのような苦境（母親の胎内）にあっても、献愛者の目にふさわしい姿として主は姿を現わします。主は何千もの宇宙よりも大きくなったり、同時に、原子よりも小さな姿になったりすることができます。主は慈悲深い方ですから、限りある生命体の目にふさわしい姿で現われるのです。私たちができる計算範囲に制限されることはありません。私たちが考えられる以上の大きさになり、私たちの目で見る物よりさらに小さくなることができます。しかし、どのような状況でも、あらゆる力をそなえた主であることに変わりありません。ウッタラーの子宮に現われた親指ほどのヴィシュヌと、神の王国であるヴァイクンタ・ダーマにいる完全無欠のナーラーヤナとのあいだに違いはまったくありません。主はアルチャ・ヴィグラハ（*arca-vigraha*）という崇拜できる神像の姿で現われ、主をじっさいに見ることのできないさまざまな献愛者の奉仕を受けいれます。物質要素として現われた主の姿であるアルチャ・ヴィグラハの慈悲によって、物質界にいる献愛者でも、通常感覚ではだれも近づけない主に容易に主に近づくことができます。ですからアルチャ・ヴィグラハは、物質的な献愛者でも見ることのできる完全に精神的な主の姿なのです。条件づけられた魂にとって双方には大きな違いがあるのですが、主にとって物体も精神もありません。主には精神的存在しかなく、同じように、主との親密な絆をもつ主の純粋な献愛者にとっても精神的存在しかありません。

第10節

अस्त्रतेजः स्वगदया नीहारमिव गोपतिः ।
विधमन्तं सन्निकर्षे पर्येक्षत क इत्यसौ ॥ १० ॥

アストウラ・テージャハ スヴァ・ガダヤー
astra-tejaḥ sva-gadayā

ニーハーランム イヴァ ゴーパティヒ
nīhāram iva gopatiḥ

ヴィダハマンタンム サンニカルシェー
vidhamantaṁ sannikarṣe

パリアイクシャタ カ イティ アサウ
paryaikṣata ka ity asau

astra-tejaḥ—ブラフマーストラの放熱； *sva-gadayā*—自分の戦闘棒を使って；

nīhāram—露のしづく; iva—~のような; gopatiḥ—太陽; vidhamantam—消滅させる行動; sannikarṣe—近くで; paryaikṣata—見ている; kaḥ—誰; iti asau—この体。

主は、太陽が露のしづくを蒸発させるようにブラフマーストラの放熱を消滅させるために動いていた。その子は主を見つめていたが、その正体がわかるはずもなかった。

第 1 1 節

विधूय तदमेयात्मा भगवान्धर्मगुब् विभुः ।
मिषतो दशमासस्य तत्रैवान्तर्दधे हरिः ॥ ११ ॥

vidhūya tad ameyātmā
bhagavān dharma-gub vibhuḥ
miṣato daśamāsasya
tatraivāntardadhe hariḥ

vidhūya—完全に洗い流されて; tat—その; ameyātmā—遍在する至高の魂; bhagavān—人格主神; dharma-gub—正しい者の保護者; vibhuḥ—至高者; miṣataḥ—見つけている間; daśamāsasya—あらゆる方角によって包まれている者の; tatra eva—直ちに; antaḥ—見えない所に; dadhe—~になった; hariḥ—主。

その子が見つめるなか、至高主人格主神・万人の至高の魂・正しき者の保護者・遍在する方、そして時と空間を完全に超越したその方が、忽然と姿を消した。

要旨解説

赤ん坊のパリークシットが見つめていたその相手は、時や空間に縛られた生命体ではありませんでした。主と個々の生命体には大きな違いがあります。主はこの節で、「時や空間に制約されない至高の生命体」と表現されています。生命体はだれであっても時や空間に束縛されています。生命体は主と質的には同じであっても、量的には大きな違いがあるのです。『バガヴァッド・ギーター』では、生命体も至高の生命体も遍在する (yena sarvam idam tatam・イエーナ サルヴァンム イダンム タタンム) と述べられていますが、双方の遍在のありかたには違いがあります。ふつうの生命体、すなわち魂は限られた肉体のなかで遍在しているのですが、至高の生命体はあらゆる空間と時のなかに遍在することができます。ふつうの生命体は、たとえ遍在性をそなえてはいても、自分の影響力を別のふつうの生命体に及ぼすことはできません。それでも、至高主、至高の魂、人格主神は、自らの影響力をあらゆる場所、

あらゆる時、あらゆる生命体に及ぼすことができます。そして、主は遍在し、時や空間に縛られない方ですから、赤ん坊のパリークシットがいる母親の子宮のなかにでさえ現われることができます。主はこの節で、正しき者の保護者、と述べられています。至高主に身をゆだねている人はだれでも正しい人物であり、どのような状況にあっても、特別に守られています。主は、正しくない人でも間接的に守ってはいます。自らの物質の力を使ってかれらの罪を正しているからです。また主はこの節で、10の方角によって包まれている者、と描写されています。この意味は、10の方角、そして上下という衣服によって包まれている、ということです。主はどこにでも存在し、どこにでもどこからでも、自分の意志で現われたり消えたりすることができます。パリークシットのまえから姿を消したということは、主がどこか別の場所からそこに現われた、ということではありません。そこにいたし、そこから消えたあとでも、その子の目には見えなくはなっただけで主はそこにいたのです。光輝く空という物質の覆いは「母なる自然の子宮」とも言え、だれもが全生命体の父である主によってその子宮の内に入れられました。主はどこにでも存在し、母なるドウルガーという物質の子宮の内にも存在しており、その姿は見る資格を持つ者が見ることができるのです。

第12節

ततः सर्वगुणोदके सानुकूलग्रहोदये ।
जज्ञे वंशधरः पाण्डोर्भूयः पाण्डुरिवौजसा ॥ १२ ॥

tataḥ sarva-guṇodarke
sānukūla-grahodaye
jajñe vaṁśa-dharaḥ pāṇḍor
bhūyaḥ pāṇḍur ivaujasā

tataḥ—そこで直ちに; sarva—すべての; guṇa—良い兆候; udarke—徐々に展開されて; sa-anukūla—好ましいものすべて; grahodaye—星座の影響; jajñe—誕生した; vaṁśa-dharaḥ—正当な後継者; pāṇḍor—パンドウの; bhūyaḥ—～である; pāṇḍur iva—まさにパンドウのような; ojasā—力によって。

そのとき、すばらしい兆候の黄道帯がすべて現われ、パンドウとまったく等しい力をそなえたまぎれもない継承者が誕生した。

要旨解説

ある生命体に影響を与える星座の天文学上の計算はたんなる推測ではなく、『シュリーマ

ド・バーガヴァタム』で確証されているように事実です。どの生命体も毎瞬間自然の法則に動かされており、それは市民が国の力に支配されているのと同じです。国の法律があることはだれに眼にも明らかですが、物質自然界の法則となると、物質的な理解を超えた希薄なものですから、じっさいに目で見られるような体験はできません。『バガヴァッド・ギーター』(3.9)で述べられているように、生きていくうえでの活動が次の反動を作りだしており、それが私たちを束縛しますが、ヤギヤ (Yajña) すなわちヴィシュヌのために活動している者たちは反動に縛られません。私たちの行動は高い権威者、主の代表者によって判断されるのであり、結果として私たちはその活動に応じた肉体を与えられます。自然の法則はひじょうに希薄であり、肉体のどの部分も特定の星の影響を受けています。そして生命体は機能する肉体を得たあと、そのなかに幽閉された状態に置かれます。人の運命は誕生したときの星座の位置で決まり、その運命を学識豊かな占星術師が確実に読みとります。それは偉大な科学であり、その科学をまちがって使えば正しい結果は得られません。マハーラージャ・パリークシット、あるいは人格主神でさえ、特定の優れた星座が構成されたときに誕生しますから、吉兆な時間帯の影響力が体を動かします。もっとも吉兆な星座をジャヤンティ (jayanti) といい、主が物質界に降誕するときに現われ、この言葉はほかの意味にはあてはまりません。マハーラージャ・パリークシットは偉大なクシャトリヤの皇帝で、またすばらしい献愛者でしたから、不吉な時間に誕生するわけがありませんでした。尊ばれる人物を招くのに適切な場所と時間が選ばれるように、マハーラージャ・パリークシットという至高主がとくに大切にす人物を受け入れるのに、適切な時間が選ばれ、吉兆な星が集結して王に影響を与えようとしたのでした。こうして王は、『シュリーマド・バーガヴァタム』に登場する偉大な英雄として知られるために誕生しました。この適切な星座は人間の意志ではなく、至高主の代表者による優れた配慮でなされます。そしてもちろん、生命体の善悪の活動に応じた配慮です。ここで重視されるのは、生命体による敬虔なおこないです。敬虔なおこないだけによって十分な富、優れた教育、美しい容姿が授かります。サナータナ・ダルマ (人類の永遠の職務) 方式にもとづくサムスカーラは、優れた星座の影響力が利用できる環境を作り出す適切な配慮ですから、優れた階級者が従うガルバーダーナ・サムスカーラ (garbhādhāna-samskāra) 「最初の種の植えつけ」の手段は、敬虔で知的段階の人々を人間社会に誕生させるための敬虔な行為の始まりです。世界に平和と繁栄をもたらすことができるのは、徳の高い、そして健全な心をそなえた人々だけです。性欲に駆られた望ましからぬ、そして不健全な人々ばかりになった社会は地獄と化し、混乱だけが生じます。

第13節

तस्य प्रीतमना राजा विप्रैर्धौम्यकृपादिभिः ।
जातकं कारयामास वाचयित्वा च मृालम् ॥ १३ ॥

*tasya prīta-manā raja
viprair dhaumya-kṛpādibhiḥ
jātakam kārayām āsa
vācayitvā ca maṅgalam*

tasya—彼の; *prīta-manāḥ*—満足した; *rājā*—ユディシュティラ王; *vipraiḥ*—博識なブラーフマナ達によって; *dhaumya*—ダウミヤ; *kṛpa*—クリパ; *ādibhiḥ*—そして他の人物達も; *jātakam*—子供の誕生直後に執行される浄化手段の一つ; *kārayām āsa*—彼らに執行させた; *vācayitvā*—吟唱によって; *ca*—もまた; *maṅgalam*—吉兆な。

マハーラーヂャ・パリークシットが誕生したことに心から満足したユディシュティラ王は、誕生を祝う浄化儀式を執行した。ダウミヤ (Dhaumya) やクリパ (Kṛpa) を筆頭とする博識なブラーフマナたちが吉兆な聖歌を吟唱した。

要旨解説

ヴァルナーシュラマ・ダルマ制度には、浄化儀式の執行に熟達した優秀で知的なブラーフマナが必要とされています。浄化の儀式がおこなわなければ善良な人々はいなくなり、その儀式が無視されているカリ時代では、全世界の人々がシュードラの気質はおろか、それ以下の質さえありません。しかも、現代ではヴェーダの浄化儀式を復活させることさえできません。適切な便宜もなく、優れたブラーフマナもいないからです。しかし、現代にはパーンチャラトウリカ制度が勧められています。この制度はカリ・ユガの人類とされるシュードラ階級の人々のためにあり、そのなかには年齢や時代にふさわしい浄化手段がもうけられています。浄化手段は精神的に高められるために認可されており、それ以外の目的に使われるものではありません。精神的に高められることは、家柄の高さや低さで決まるわけではありません。

ガルバーダーナの浄化儀式のあとには、妊娠期間におこなわれるシーマントーンナヤナ (*śimantonnayana*) やサダバクシャナム (*sadhabhakṣaṇam*) が、さらに最初の子どもが誕生したときにはジャータカルマン (*jātakarman*) などといったサムスカーラが用意されています。このような儀式がマハーラーヂャ・ユディシュティラによって執行され、その補佐にあたったのが、王家の僧侶で博識なブラーフマナのダウミヤ、僧侶でありまた偉大な將軍でもあったクリパーチャーリヤでした。マハーラーヂャ・ユディシュティラは、儀式を執行するために、博識で完璧なこの二人の僧侶を、そして二人を補佐した他の優れたブラーフマナたちを採用しました。ですから、サムスカーラの浄化儀式は単なる形式あるいは社会的儀礼ではなく、実用的な目的があり、ダウミヤやクリパのような熟達したブラーフマナによ

て適切におこなわれます。そのようなブラーフマナは希有な存在であり、またいまではどこにも見られないため、ゴースヴァーミーたちは、この墮落した時代で精神的に高められる目的として、ヴェーダの儀式ではなくパーンチャラトウリカ制度を推薦しています。

クリパーチャーリャは、偉大なりシであるサルドウバンの子で、ガウタマの家系に誕生しました。その誕生は偶発的だったとされています。あるとき偉大なサルドウバン・リシがたまたま天界の乙女に出会い、リシは射精し、それが2つの容器に保存されました。すぐに2つの容器から男児と女児が双子として誕生しました。男児はのちにクリパと、女児はクリピーと呼ばれることとなります。密林で狩りをしていたマハーラージャ・シャンタヌが、二人の幼児を見つけて宮殿に持ちかえり、適切な浄化手段をとおして二人をブラフマンとして育てました。クリパーチャーリャはその後ドウローナーチャーリャに匹敵する偉大な将軍となり、クリピーはドウローナーチャーリャに嫁ぎました。クリパーチャーリャは後にクルクシェートラの戦いでドゥリヨーダナ側に加わります。そしてマハーラージャ・パリークシットの父親であるアビマンニュの殺害に荷担しましたが、ドウローナーチャーリャに匹敵する偉大なブラーフマナであったためにパーンダヴァ家の人々の信望を集めました。パーンダヴァ兄弟がドゥリヨーダナとの賭博に負けて森に追放されたとき、ドゥリタラーシュトウラはクリパーチャーリャにパーンダヴァ兄弟を守るよう指示しています。戦いが終わり、クリパーチャーリャはふたたび王家にもどり、マハーラージャ・パリークシットが生まれるとき、その誕生の儀式を成功させるために吉兆なヴェーダ聖歌を吟唱しました。マハーラージャ・ユディシュティラは隠遁してヒマラヤに向かうまえ、マハーラージャ・パリークシットを弟子として育てるようクリパーチャーリャに預けましたが、クリパーチャーリャのその世話に満足して、宮殿をあとにしました。偉大な統治者、王、皇帝は、いつでもクリパーチャーリャのような博識なブラーフマナの導きを受け、こうして行政上の責任を適切にまっとうすることができました。

第14節

हिरण्यं गां महीं ग्रामान् हस्त्यश्वाङ्घ्रिपतिर्वरान् ।
 प्रादात्स्वन्नं च विप्रेभ्यः प्रजातीर्थे स तीर्थवित् ॥ १४ ॥

*hiraṇyam gām mahīm grāmān
 hasty-aśvān ṅṛpatir varān
 prādāt svannaṁ ca viprebhyaḥ
 prajā-tīrthe sa tīrthavit*

hiraṇyam—金; gām—雌牛; mahīm—土地; grāmān—村; hasty—象; aśvān—馬;

nṛpatiḥ—王; *varān*—報酬; *prādāt*—慈善として与えた; *su-annam*—良質の穀物; *ca*—そして; *viprebhyaḥ*—ブラーフマナ達に; *prajā-tīrthe*—息子の誕生日にする慈善を差し出す機会に; *saḥ*—彼; *tīrtha-vit*—慈善をどのように、いつ、どこにすべきか知っている者。

子息が誕生したことで、慈善をどのように、どこに、いつすべきか知っている王は、金・土地・村・象・馬・良質の穀物をブラーフマナたちに施した。

要旨解説

ブラーフマナとサンニャーシーだけに、世帯者から慈善を受けとる特権が与えられています。さまざまなサムスカーラ、とくに誕生、結婚、死亡のときにおこなわれ、財産がブラーフマナに与えられます。ブラーフマナが、人類にとってもっとも必要な奉仕を最上の質で提供するからです。その慈善は、黄金・土地・村・馬・象・食糧、料理用の他の食材という形で豊富になされていました。ですから、じつはブラーフマナは貧しいわけではありません。すでに金・土地・馬・象・十分な穀物を保有していたのですから、生計をたてるために働く必要がありませんでした。社会の福利のために献身的に働いていたのです。

王は、どこでいつ慈善を施すべきかを知っていたため、*tīrthavit* (ティールタハヴィトゥ) という言葉には重要な意味がこめられています。なんの効果も生まない慈善はすべきではありませんし、また盲目的な慈善も戒められるべきです。「慈善とは、精神的な悟りを持ち、慈善を受けるにふさわしい人物に与えるものである」とシャーストラが説明しています。至高主を知らない人間が自分をダリドゥラ・ナーラーヤナと呼んだりしますが、シャーストラは「正しい資格のないかれらは慈善を受ける対象ではない」と言います。また、あさましく貧しいそのような人間が、馬・象・土地・村などの寛大な慈善を受けることもできません。結論として、知的な人物、ブラーフマナたちは主への奉仕だけに励んでおり、体に必要な物事で心配することなく適切に守られており、国王も世帯者たちも快くブラーフマナの世話をしていたものです。

シャーストラでは、胎児が母親と臍の緒と結ばれているあいだは、その子は母親と同体であるとされていますが、緒が切られて母親と離れたときにジャータカルマン (*jātakarman*) という浄化儀式をする、と定められています。宇宙を管理する半神や家族の先祖が新しく誕生した子を見に訪れることがあります。それは、社会を精神的に高めるにふさわしい人物に自分の財産を分配する適切な時とされています。

第 15 節

तमूचुर्ब्राह्मणास्तुष्टा राजानं प्रश्रयान्वितम् ।
एष ह्यस्मिन् प्रजातन्तौ पुरुषां पौरवर्षभ ॥ १५ ॥

tam ūcur brāhmaṇās tuṣṭā
rājānam praśrayānvitam
eṣa hy asmin prajā-tantau
purūṇām pauravaṛṣabha

tam—彼に; ūcuḥ—語りかけた; brāhmaṇāḥ—博識なブラーフマナ達; tuṣṭāḥ—非常に満足; rājānam—王に; praśraya-anvitam—非常に親切な; eṣaḥ—これ; hi—確かに; asmin—その家系の中の; prajā-tantau—継承された家系; purūṇām—プール家の; paurava-ṛṣabha—プール家の筆頭者。

王の慈善に心から満足した博識なブラーフマナたちは、かれをプール家の筆頭者と呼び、その子がまちがいなくプール家から伝わる家系にいることを知らせた。

第 16 節

दैवेनाप्रतिघातेन शुचो संस्थामुपेयुषि ।
रातो वोऽनुग्रहार्थाय विष्णुना प्रभविष्णुना ॥ १६ ॥

daivenāpratighātena
śukle saṁsthām upeyuṣi
rāto vo 'nugrahārthāya
viṣṇunā prabhaviṣṇunā

daivena—超自然的力で; apratighātena—抵抗できないものによって; śukle—純粋な人物に; saṁsthām—破滅; upeyuṣi—強いられて; rātaḥ—救われた; vaḥ—あなたのために; anugraha-arthāya—慈悲を示すため; viṣṇunā—遍在する主によって; prabhaviṣṇunā—全能者によって。

ブラーフマナたちが言う。「心清らかなこの子は、全能で遍在する主ヴィシュヌ、人格主神によって、あなたに慈悲をしめすためによみがえった。この子は、抵抗不可能の超自然的武器によって殺される定めにあったところを救われた」

要旨解説

パリークシットは、全能で遍在するヴィシュヌ（主クリシュナ）に救われましたが、その理由には2つありました。最初の理由として、母親の胎内にいたその子が、主の純粋な献愛者だから純真無垢であったことが挙げられます。第2の理由は、その子がプル家のただ一人

生きのこった子孫だった点にあります。プル家は、高潔なユディシュティラ王の敬虔な祖先です。主は、自分の体表者である敬虔な王家が地球を治め、幸福で繁栄に満ちた生活というほんとうの発達が達成されることを望んでいます。クルクシェートラの戦争が終わったあと、マハーラーヂ・ユディシュティラの次の世代も絶え、この偉大な王家を継ぐ子は生まれていませんでした。アビマニュの子息マハーラーヂャ・パリークシットだけが唯一の生き残りであり、アシュヴァッターマーが放っただれも対抗できない、そして超自然的な武器であるブラフマーストラによって命を脅かされました。主クリシュナはこの節でヴィシュヌと呼ばれていますが、これには重要な意味がこめられています。主クリシュナは根源の人格主神であり、ヴィシュヌの力を使って守ったり破壊したりします。主ヴィシュヌは主クリシュナの完全分身です。主の遍在的な活動は、ヴィシュヌの様相のなかでおこなわれます。パリークシットはこの節で純真な穢れのない子どもとして述べられていますが、それはこの子が主の無垢な献愛者だったからです。無垢な献愛者は、主の使命をまっとうするためだけに現われます。主は物質界でさまよっている条件づけられた魂をふるさとへ、神のもとへ返したいと願っており、そのために超越的なヴェーダ経典を準備してかれらを助けようとし、神聖な伝道師を送ったり、あるいは自分の代表者である精神指導者を送ったりしてかれらを助けます。そのような超越的な文献、伝道師や主の代表者は純粹無垢、潔白です。物質的な気質はかれらには触れることさえできないからです。また、破滅という恐怖に襲われてもいつも主に守られます。そのような脅迫は愚かな物質主義者が起こすものです。アシュヴァッターマーから赤ん坊のパリークシットをめがけて発射されたブラフマーストラは超自然的な武器であり、その圧倒的な力に対抗できるものは物質界にありません。しかし、内にも外にもあらゆる場所に遍在している全能の主は、全能の力を使って対抗することができました。主の誠実な献愛者を救うために、そして主にいつでも好意を授かっているマハーラーヂ・ユディシュティラという献愛者の子孫を救うために。

第 17 節

तस्मान्नाम्ना विष्णुरात इति लोके भविष्यति ।

न सन्देहो महाभाग महाभागवतो महान् ॥ १७ ॥

tasmān nāmnā viṣṇu-rāta

iti loke bhaviṣyati

na sandeho mahā-bhāga

mahā-bhāgavato mahān

tasmāt—ゆえに; *nāmnā*—その名前で; *viṣṇu-rātaḥ*—ヴィシュヌ、人格主神によって守

られた; *iti*—そのように; *loke*—全惑星で; *bhaviṣyati*—よく知られるようになるだろう; *na*—無い; *sandehaḥ*—疑い; *mahā-bhāga*—もっとも幸運な; *mahā-bhāgavataḥ*—主の一流の献愛者; *mahān*—あらゆる優れた気質を備えた。

その理由で、この子は人格主神に守られた者として世界中にその名を知られるようになるだろう。もっとも幸運な者よ。この子が一流の献愛者にあることに疑いはなく、優れた気質をすべてそなえた人物になるだろう。

要旨解説

主は至高の指導者ですから、どのような生命体でも守ります。ヴェーダ聖歌も、主があらゆる人物のなかの最高の人物であることを明言しています。2種類の人物の違いは、片方の人物、すなわち人格主神がもう片方の生命体すべてを養っている点にあり、その主を知ることによって永遠の平和を手にすることができます（『カタ・ウパニシャッド』）。主のさまざまな力をおしてさまざまな段階の生命体を守ろうとしますが、純真無垢な献愛者のことは、主が自ら守ろうとします。ですから、マハーラージャ・パリークシットは母親の胎内に入ったそのときから守られ、またとくに主によって守られたというこの出来事から判断すると、優れた気質をすべてそなえた一流の献愛者であると結論することができます。献愛者は3段階に分けられます。マハー・バーガヴァタ (*mahā-bhāgavata*)、マデヤマ・アディカーリー (*madhyam-adhikārī*)、カニシュタ・アディカーリー (*kaniṣṭha-adhikārī*) です。主の寺院に行っても、神の科学を十分に理解せずに神像に敬意を表し、またそのために献愛者にまったく敬意を表わさない者を物質主義の献愛者、すなわち3番目のカニシュタ・アディカーリーといいます。次に、主への真正な奉仕の境地を高め、同じ境地にいる献愛者だけと友好関係を保ち、初心者に好意をしめし、無神論の人を避けようとする献愛者を、2番目の段階の献愛者といいます。しかし、すべてを主のなかに、主のものとして見て、すべてのなかに主との永遠な関係を見て、そしてそうすることでなにを見ても主を除外した見方をしない人物をマハー・バーガヴァタ、すなわち一流の献愛者といいます。一流の献愛者はすべてにおいて完璧です。献愛者はどの段階にいてもやがて優れた気質をすべてそなえるのですから、マハーラージャ・パリークシットのようなマハー・バーガヴァタ献愛者は、あらゆる面で完璧であると断言できます。そして、マハーラージャ・パリークシットはマハーラージ・ユディシュティラの家系に誕生したことから、マハー・バーガヴァタ、すなわち幸運な者のなかでももっとも幸運な者と呼ばれています。マハー・バーガヴァタが生まれたその家系は幸運です。一流の献愛者が誕生したことで、その家系の過去・現在・未来の100世代の人々すべてが、主に愛されている献愛者を尊ぶその心ゆえに、主の恩寵によって解放されるからです。純粋な献愛者になればもっとも崇高な恩恵が授かる、ということです。

第 18 節

श्रीराजोवाच

अप्येष वंश्यान् राजर्षीन् पुण्यश्लोकान् महात्मनः ।

अनुवर्तिता स्विद्यशसा साधुवादेन सत्तमाः ॥ १८ ॥

śrī-rājovāca

apy eṣa vaṁśyān rājarṣīn

puṇya-ślokān mahātmanah

anuvartitā svid yaśasā

sādhu-vādena sattamāḥ

śrī-rājā—あらゆる面で優れた王（マハーラーज・ユディシュティラ）；*uvāca*—言った；*api*—〜かどうか；*eṣaḥ*—この；*vaṁśyān*—家系；*rāja-ṛṣīn*—真正な王達の；*puṇya-ślokān*—その名前通りに敬虔な；*mahā-ātmanah*—すべての偉大な魂；*anuvartitā*—従者；*svit*—〜になるだろう；*yaśasā*—達成によって；*sādhu-vādena*—称讃によって；*sat-tamāḥ*—偉大な魂達よ。

徳高き王（ユディシュティラ）が尋ねる。「偉大な魂たちよ。この子は、神聖な王になるでしょうか。その名がしめすような敬虔な者になるでしょうか。そしてこの偉大な王家に現われた他の人々のように、活動をとおして世に聞こえ、讃えられるでしょうか」

要旨解説

ユディシュティラ王の祖先はだれもが偉大な神聖な王であり、優れた貢献を残したことで敬虔な人々として讃えられてきました。「王座に座る聖者」だったのです。だからこそ、国中のだれもが幸せで、敬虔で、正しく行動し、裕福で、精神的に高められていました。偉大かつ神聖な王は、高貴な魂たちや精神的教えという厳正な導きのもとに訓練され、その結果、国内には神聖な住民があふれ、精神生活にふさわしい幸福な地になっていました。マハーラーज・ユディシュティラ自身が偉大な先祖の質をそのまま受けついでた人物であり、自分を継ぐ王が、かの偉大な先祖のようになってくれることを望んでいました。そして、占星術を読んだ偉大なブラーフマナたちが、生まれくるその子が主の一流の献愛者と予言したことを大いに喜び、そしてさらに詳しく、偉大な先祖の足跡に従ってくれるかどうか知りたと思いました。それが君主国の在り方です。国を治める王は敬虔で勇気ある献愛者であり、そして罪人たちには恐れの特権にならなくてはなりません。また善良な市民を治めるためにも、自分に等しい資質を明らかにそなえた相続者を残さなくてはなりません。現代の民主主義国家

では、大衆がシュードラやそれ以下の状態に墮落しており、政府はその大衆の代表者に動かされています。その代表者も、経典がしめす行政方法についてなにも知りません。この結果、欲情や貪欲の形をとってシュードラの気質が全世界に蔓延しています。このたぐいの政治家たちは来る日も来る日も口論に明け暮れています。だれかが大臣になっても、やがて政党や団体の勝手な都合で別の人間がその椅子に座ります。政治家は、死ぬまで国の資力を搾取したいと思っています。いつか追い出される日が来るまで、政治生命を諦めたりはしません。そのような低俗な人間たちが、国民の利益になることをしてくれるのでしょうか。かれらの政治の結果は、腐敗、謀略、偽善だけ。国を治める者たちは、さまざまな地位に就くまえに、理想的な政治家とはどういうものかを『シュリーマド・バーガヴァタム』から学ばなくてはなりません。

第 19 節

श्रीब्राह्मणा ऊचुः

पार्थ प्रजाविता साक्षादिक्ष्वाकुरिव मानवः ।

ब्रह्मण्यः सत्यसन्धश्च रामो दाशरथिर्यथा ॥ १९ ॥

brāhmaṇā ūcuḥ

pārtha prajāvitā sākṣād

ikṣvākur iva mānavaḥ

brahmaṇyaḥ satya-sandhaḥ ca

rāmo dāśarathir yathā

brāhmaṇāḥ—優れたブラーフマナ達; *ūcuḥ*—言った; *pārtha*—プリター (クンティー)の子よ; *prajā*—生まれる者達; *avitā*—維持者; *sākṣāt*—直接に; *ikṣvākuḥ iva*—まさにイクシュヴァーク王のように; *mānavaḥ*—マヌの子息; *brahmaṇyaḥ*—ブラーフマナの従者で、そしてブラーフマナたちに敬意を表している; *satya-sandhaḥ*—約束に忠実な; *ca*—もまた; *rāmaḥ*—人格主神ラーマ; *dāśarathiḥ*—マハーラージャ・ダシャラタの子息; *yathā*—主のように。

博識なブラーフマナたちが言った。「プリターの子よ。この子は、この世に誕生する者すべての維持者として、まさにマヌの子息であるイクシュヴァーク王のようになる。そしてブラフマンの原則に従うことでは、とくに約束に誠実であることについては、マハーラージャ・ダシャラタの子息、人格主神ラーマその方に匹敵する存在になるだろう」

要旨解説

Prajā (プラジャー) は、物質界に生まれる生命体のことです。じっさいには生命体は生まれも死にもしませんが、主への奉仕から離れ、物質自然界を支配する望みのために、物質的望みを満たすにふさわしい体を授かっています。そうすることで、私たちは物質自然の法則に条件づけられ、*肉体はその活動に応じて変化します*。こうして生命体は840万種類の生物種のなかで、ある体から別の体に転生していきます。しかし、主の部分体であることから、生活に必要なものすべてを主から授かっているだけではなく、主や主の代表者、すなわち神聖な国王によって守られています。神聖な国王はすべてのプラジャー・生物が生きつづけられるように、そして物質界での幽閉の歳月をまっとうできるように守ります。マハーラージャ・パリークシットは真に理想的で神聖な王です。国内を巡視していたとき、カリの権化が哀れな乳牛を殺そうとする様を見て、すぐにその男を殺人者として罰しようとしたからです。これは、動物でさえ神聖な統治者に守られる証ですが、感傷的な視点からではなく、「物質界に誕生した者にはだれであろうと生きる権利がある」という視点からとられた行動です。太陽の王から地球の王にいたるまで、王たちはヴェーダ經典の威信にのっとなってそのような行動に出るのです。『バガヴァッド・ギーター』(第4章・第1節)が言及しているように、ヴェーダ經典は高位の惑星でも説かれており、主が太陽神(ヴィヴァスヴァーン)に教えを説き、その内容は師弟継承をとおして太陽神から子息のマヌへ、マヌからマハーラージャ・イクシュヴァークへ、と語り継がれました。ブラフマーの1日に14人のマヌが誕生しますが、この節で言及されているのは7番目のマヌで、プラジャーパティ(子孫を作る人々)でもあり、太陽神の子息です。ヴァイヴァスヴァタ・マヌという名前でも知られています。10の子息をもうけ、マハーラージャ・イクシュヴァークはその1人です。マハーラージャ・イクシュヴァークも父親のマヌから、『バガヴァッド・ギーター』が説くバクティ・ヨーガを学び、そのマヌも父親である太陽神から同じ教えを授かっています。その後、『バガヴァッド・ギーター』の教えはマハーラージャ・イクシュヴァークからの師弟継承をとおして引き継がれましたが、時の流れとともに無責任な人々のためにそのつながりが絶え、クルクシェートラの戦場でアルジュナにふたたび教えられる必要がありました。このように、すべてのヴェーダ經典は物質界が創造されたときから後生に伝えられ、そのためアパウルシェーヤ(apauruṣeya)「人間が作ったものではない」と表現されています。ヴェーダの知識は主によって語られ、宇宙最初の生物ブラフマーが初めて聞きました。

Mahārāja Ikṣvāku (マハーラージャ・イクシュヴァーク) ヴァイヴァスヴァタ・マヌの子息の一人。100人の子をもうけ、また肉食を禁じました。その子シャシャーダが、父の死後、王になりました。

Manu(マヌ) この節でイクシュヴァークの父と述べられているマヌは、7番目のマヌ、

でヴァイヴァスヴァタ・マヌ（太陽神ヴィヴァスヴァーンの子息）で、主クリシュナは、アルジュナに『バガヴァッド・ギーター』を教えるまえに、同じ教えを授けています。人類はマヌの子孫です。このヴァイヴァスヴァタ・マヌには10人の子がおり、それぞれイクシュヴァーク、ナバガ、ドウリシュタ、シャリヤーティ、ナリッシャンタ、ナーバーガ、ディシュタ、カルーシャ、プリシャドウラ、ヴァスマーンといます。主の化身のマトウシャ（巨大な魚）は、ヴァイヴァスヴァタ・マヌの統治の初期に現われました。ヴァイヴァスヴァタ・マヌは父親であるヴィヴァスヴァーン・太陽神から『バガヴァッド・ギーター』の原則を学び、同じ教えを息子のマハーラージャ・イクシュヴァークに教えました。トゥレーター・ユガの初期、太陽神はマヌに献愛奉仕について教え、マヌは次に全人間社会の幸福のためにイクシュヴァークに教えました。

Lord Rāma（主ラーマ） 至高人格主神はシュリー・ラーマとして降誕し、アヨーデヤーの王で、純粋な献愛者だったマハーラージャ・ダシャラタの子息となりました。主ラーマは、弟として誕生した自らの完全分身たちとともに降誕しています。主は、トゥレーター・ユガにおける月が満ちて9日目のチャイトウラの月に現われ、化身の使命として宗教原則を確立させ、混乱の原因を取りのぞきました。少年だったころ、主はスバフを、そしてマーリーチャという魔女を殺し、大聖者ヴィシュヴァーミトウラを助けました。当時、悪魔たちが聖者たちの日々の義務の執行を邪魔していたからです。ブラーフマナとクシャトリヤには大衆の幸福のために協力しあう義務があります。ブラーフマナでもある聖者は、完璧な知識で人々を啓発させるよう精励し、クシャトリヤにも市民を守る義務があります。主ラーマチャンドラは、ブラフマニヤ・ダルマ (brahmanya-dharma) という人類の最高の文化を維持・守る理想的な王です。主は、とくに乳牛やブラーフマナの保護者であり、そのようにして世界を繁栄させます。主は、ヴィシュヴァーミトウラという代表者をとおして、管理する立場にいる半神たちに効果的な武器を与え、悪魔たちを征服させました。またジャナカ王の弓の儀式に参加し、シヴァの無敵の弓を真っ二つにして、王の娘シーターデーヴィーと結婚しました。

結婚したあと、父のマハーラージャ・ダシャラタの命令に従い、14年間におよぶ森での追放生活に耐えました。半神たちが宇宙を管理できるように、14,000人の悪魔を殺害しましたが、かれらの奸策のために妻シーターデーヴィーはラーヴァナによって誘拐されます。主はスグリーヴァと兄弟のちぎりを交わし、スグリーヴァは主の助けを借りて兄のヴァリを殺すことができ、主ラーマの助けを借りてヴァーナラス（ゴリラ族）の王になりました。主はインド洋上に石の橋を浮かべ、シーターを誘拐したラーヴァナの王国ランカーに攻めいりました。後に、ラーヴァナは主の手で殺され、ラーヴァナの弟ヴィビーシャナがランカーの王座に就きます。ヴィビーシャナは悪魔ラーヴァナの兄弟の一人ですが、主ラーマの祝福によって不死の身になりました。14年の歳月が過ぎ、ランカーの国勢を収めたあと、花の飛

行船に乗って自分の王国アヨーデャーに戻りました。弟のシャトゥルグナに命じて、マトウラーに君臨していたラヴナーズラを攻撃させ、この悪魔は殺害されました。主ラーマはアシュヴァメーダ儀式を10回執行し、そののち、シャラユ川で沐浴していたとき、忽然と姿を消しました。『ラーマヤナ』は偉大な詩人ヴァールミーキによって著された偉大な叙事詩で、主ラーマのこのような冒険が描写されています。

第20節

एष दाता शरण्यश्च यथा ह्यौशीनरः शिबिः ।
यशो वितनिता स्वानां दौष्यन्तिरिव यज्वनाम् ॥ २० ॥

*eṣa dātā śaraṇyaś ca
yathā hy auśīnaraḥ śibiḥ
yaśo vitanitā svānām
dauṣyantir iva yajvanām*

eṣaḥ—この子; *dātā*—慈善を寄贈する者; *śaraṇyaḥ*—服従した者の保護者; *ca*—そして; *yathā*—〜として; *hi*—確かに; *auśīnaraḥ*—ウシーナラという名の国; *śibiḥ*—シビ; *yaśaḥ*—名声; *vitanitā*—広める者; *svānām*—親族の; *dauṣyantīḥ iva*—ドウッシャンタの子、バラタのような; *yajvanām*—数多くの儀式を執行した者達の。

この子は、かのウシーナラ国の名高いシビ王のように、寛大な慈善を施し、そして身をゆだねた者を守るだろう。そして、マハーラージャ・ドウッシャンタの子であるバラタのように、自分の家系の名と誉れ世に広めることだろう。

要旨解説

王は、慈善を施すことで、ヤギヤの執行によって、そして身をゆだねた人々を守ることでその名を世に知らしめます。クシャトリヤの王は、身をゆだねた人を守ることに誇りを感じるものです。そのことを *iśvara-bhava* (イーシュヴァラ・バハヴァ)、すなわち「正当な理由にもとづいて人を守る真の力」といいます。『バガヴァッド・ギーター』で主は、だれもが主に身をゆだねるよう説いていますし、それができればあらゆる面で守られることを約束しています。主は全能で自分の言葉に忠実な方ですから、献愛者を守る約束をはたさないことはありません。王はそんな主の代表者なのですから、服従した人々をぜがひでも守るという姿勢が必要です。ウシーナラ国のマハーラージャ・シビはマハーラージャ・ヤヤーティの親友で、ヤヤーティ王はシビ王と天界に行くことができました。マハーラージャ・シビは、自分が死

んだあとに移される天界の惑星を知っており、この惑星の説明は『マハーバーラタ』（アーディ・パルヴァ 第96章・第6－9節）にあります。マハーラージャ・シビはじつに心の広い人物で、手に入れたその惑星での地位をヤヤーティに譲りたいと考えました。しかし、ヤヤーティは断わります。ヤヤーティはアシュタカや他の偉大なりシたちとその惑星に行きました。その途中、ヤヤーティはリシたちの質問を受けて、シビの敬虔なおこないについて説明しました。ヤヤーティはヤマラージャの立法府の一員になり、ヤマラージャはヤヤーティの主宰神になりました。『バガヴァッド・ギーター』でも明言されているように、半神の崇拜者は半神の惑星に行きます (*yānti deva-vratā devān* ヤーンティ デーヴァ・ヴラター デーヴァーン 第9章・第25節)。こうして、マハーラージャ・シビは、その惑星で、偉大なヴァイシュナヴァの権威者であるヤマラージャの交流者になりました。地球に住んでいたとき、シビ王は救いを求めてきた者の保護者として名高い存在になり、また慈善を施す人物になりました。あるとき、天界の王がハトを捕縛する鳥（ワシ）の姿になり、火の神アグニがハトの姿になりました。ハトはワシに追われ、マハーラージャ・シビの膝の上に救いを求めます。ワシが王にハトを渡すよう要求すると、王は、別の肉を差しだすからハトを殺さないよう答えます。ワシは王の提案を断りましたが、やがて解決の方法として、ワシが王の体からハトと同じ重さの肉を切りとることになりました。王は自分の体から肉を切り取りましたが、天秤で量るとその不思議なハトは切りとった肉よりも重いのです。そこで王はハトと同じ体重になるために秤にりましたが、その王の行為を見て半神たちは大いに喜びました。天国の王と火の神は正体を現わして王を祝福し、デーヴァルシ・ナーラダも、マハーラージャ・シビが得たそのすばらしい気質、とくに慈善と庇護の精神を褒めたたえました。またマハーラージャ・シビは、自分の国にいる人間たちの満足のために我が子を犠牲にしています。こうして、パリークシットは慈善と庇護の心で、2番目のシビとなったのです。

ダウッシャンティ・バラタ (*Dauṣyanti Bharata*) ヴェーダ経典では多くのバラタが登場しますが、なかでも、主ラーマの弟バラタ、リシャバ王の子バラタ、マハーラージャ・ドゥッシャンタがよく知られています。またその名は宇宙全体に知れわたっています。地球はバーラタ、あるいはバーラタ・ヴァルシャ (*Bhārata-varṣa*) という名で知られていますが、それはリシャバ王の子のバラタ王によるものですが、別の情報では、この地がバラタと呼ばれるのはドゥッシャンタの子息の統治に由来するもの、とされています。私たちのサンプラダーヤでは、この地球のバーラタ・ヴァルシャという名前はリシャバ王の子のバラタの統治によって確立されたものとしています。それ以前は、イラーヴァティ・ヴァルシャ (*Ilāvati-varṣa*) と知られていましたが、リシャバ王の子であるバラタが王座に就いた直後から、バーラタ・ヴァルシャとして知られるようになりました。

確かにこのような史実はありますが、マハーラージャ・ドゥッシャンタの子息のバラタが重要な人物であったことは疑いのない事実です。かれは、かの美しい女性シャクンタラーの

子でした。マハーラージャ・ドウッシャントは森で会ったシャクンタラーに魅せられ、バラタが誕生しました。そのあとマハーラージャはカンヴァ・ムニに呪われてシャクンタラーを忘れ、バラタは母親によって森で育てられました。バラタは幼いころからすばらしい力を発揮し、子どもが犬や猫と遊ぶように、ライオンや象に戦いを挑んでいました。あまりにも力を持つこの子は、いま風にいえば「ターザン」よりも強くなり、森に住んでいたリシたちはバラタをサルヴァダマン、「だれをも屈服させる者」と呼ぶようになりました。マハーラージャ・バラタに関する詳細な説明は『マハーバーラタ』のアーディ・パルヴァの章にあります。パーンダヴァたち、あるいはクルたちはときにはバーラタと呼ばれることがありますが、それはドウッシャントの子であるこの有名なマハーラージャ・バラタの家系に誕生したからです。

第21節

धन्विनामग्रणीरिष तुल्यश्चार्जुनयोर्द्वयोः ।
हुताश इव दुर्यर्षः समुद्र इव दुस्तरः ॥ २१ ॥

*dhanvinām agrañīr eṣa
tulyaś cārjunayor dvayoḥ
hutāśa iva durdharṣaḥ
samudra iva dustaraḥ*

dhanvinām—その偉大な弓兵; *agrañīḥ*—筆頭者; *eṣaḥ*—この子ども; *tulyaḥ*—等しく優れている; *ca*—そして; *arjunayoḥ*—アルジュナ達の; *dvayoḥ*—二人の; *hutāśaḥ*—火; *iva*—~のような; *durdharṣaḥ*—抵抗できない; *samudraḥ*—海; *iva*—~のような; *dustaraḥ*—勝つことができない。

偉大な弓士のなかで、この子はアルジュナに匹敵した者となる。だれも火に対抗できない、だれも海を乗り切ることができない——この子はそのような質をそなえた存在となる。

要旨解説

歴史には二人のアルジュナがいます。一人はハイハヤの国王カールッタヴィーリヤ・アルジュナ、もう一人はこのパリークシットの祖父です。どちらのアルジュナも弓士として高名な人物で、子どものパリークシットは二人に匹敵するほどの、とくに戦闘能力に優れた人物になると予言されています。以下に、パーンダヴァ・アルジュナについて概説します。

パーンダヴァ・アルジュナ (Pāṇḍava Arjuna) 『バガヴァッド・ギーター』に登場す

る偉大な英雄。マハーラージャ・パンドに生まれたクシャトリヤの子。クンティーデーヴィー女王にはどの半神でも呼ぶことのできる力があり、あるときインドラを呼んだことがあります。その結果、インドラによってアルジュナが誕生しました。この理由から、アルジュナは天界のインドラ王の分身とされています。誕生したのがパルグナの月（2月～3月）ということで、パルグニと呼ばれることもあります。アルジュナがクンティーの子として誕生したとき、その未来の栄光が天から予言され、ガンダルヴァ、アーディテヤ（太陽の住人）、ルドウラ、ヴァス、ナーガ、さまざまな重要なリシ（聖者）たち、アプサラ（天国の社会に住む女性）をはじめとする半神たちが、その誕生の儀式に参加しました。出席したアプサラたちは天上の舞や歌で人々を楽しませました。主クリシュナの父、そしてアルジュナの母方の伯父であるヴァスデーヴァは、カッシャパという自分の家系の僧侶を送り、アルジュナを清めるため、定められたサムスカーラ（浄化手段）を実行させました。名前を授けるサムスカーラは、シャタスリンガの住人であるリシたちのまゝで執行されました。アルジュナは4人の妻をめぐっています。それはドウラウパディー、スバドウラー、チトウランガダー、ウルーピーで、その妻たちのあいだでシュルタキールティ、アビマンニュ、バブルヴァーハナ、イラーヴァーンという子どもをもうけました。

生徒として学んでいたとき、偉大な教師ドウローナーチャーリヤのもとで他のパンドヴァ兄弟やクル家の兄弟たちと勉学に励みました。しかし、学問に励む熱意ではアルジュナの右に出る者はなく、ドウローナーチャーリヤはアルジュナに対して訓練する側としてとくに愛情を注いでいました。そしてアルジュナをもっとも優れた学者として認め、自分が持っていた軍事的知識すべてを授け、祝福しました。アルジュナは向学心に燃える生徒で、夜になっても弓術を学びつづけていたため、ドウローナーチャーリヤはアルジュナを世界一の弓兵にする決意を固めていました。アルジュナがあざやかに的を射るたびに、ドウローナーチャーリヤは心から嬉しく思いました。マニプールやトリプラの王家はアルジュナの子息であるバブルヴァーハナの子孫です。アルジュナはドウローナーチャーリヤがワニに襲われたときに救いましたが、アーチャーリヤはその行為を大いに喜び、ブラフマシラ (brahmasira) という名の武器をアルジュナに授けました。マハーラージャ・ドウルパダはドウローナーチャーリヤに敵意を抱いていたことを知っていたため、かれがドウローナーチャーリヤを攻撃したとき、アルジュナはマハーラージャ・ドウルパダを捕らえ、ドウローナーチャーリヤのまゝに連れていきました。アルジュナはマハーラージャ・ドウルパダが治めるアヒッチャトウラという名の都市を包囲し、そして占領したあと、ドウローナーチャーリヤに献上しました。ブラフマシラ武器の秘術がアルジュナに説明され、アルジュナは、師が自分の敵となってもこの武器を使うときになったときだけに使うことを約束しました。このときすでに、師はクルクシェートラの戦争で敵方になって戦いを相まみえることを察しています。マハーラージャ・ドウルパダは師アーチャーリヤの代わりに戦ったアルジュナに負けはしたものの、

娘のドウラウパディーをこの若き戦士に嫁がせることに決めましたが、ドウリョーダナのくらみでアルジュナが蠟(ろう)の家で焼け死んだ、という（じつは）まちがった知らせに力を落としました。そのため、ドウラウパディーの婿選びの競技会を開き、天井に吊した魚の目を射貫いた者が婿になるという計画をたてました。このような離れ業はアルジュナしかできないとわかっていたからこそ、ドウラパダはこのような機会を設けたのであり、そして思惑どおりにアルジュナは首尾よく魚の目を射貫き、自分と同じほど優れた娘をアルジュナに嫁がせることができました。当時アルジュナの兄弟たちは、ドウリョーダナの同意のもとで素性を隠して暮らしており、アルジュナと兄弟たちはブラーフマナの姿に変装し、ドウラウパディーの婿選びの競技会に出席していました。集まっていたクシャトリヤの王たちは、名もない貧しいブラーフマナが夫としてドウラウパディーから祝福の花輪を授かったとき、シュリー・クリシュナはかれの正体をバララーマに明かしました。

アルジュナはハリドウヴァーラ（ハルドワール）で、ナーガローカに住むウルーピーという娘を見そめ、その結果イラヴァーンが誕生しました。同じように、マニプラの王の娘だったチトゥランガダーに会い、そしてバブルヴァーハナが生まれました。あるとき主シュリー・クリシュナは、妹のスバドゥラーを誘拐する手助けする計画をたてました。というのは、バラデーヴァがかのじよをドウリョーダナに嫁がせたいと考えていたからです。ユディシュティラの考えもシュリー・クリシュナと同じで、こうしてスバドゥラーはアルジュナによって強引に連れさられ、アルジュナと結婚しました。スバドゥラーの子はアビマンニュ、つまりパリークシット・マハーラージャの父親です。パリークシット・マハーラージャはアビマンニュの遺児です。アルジュナはカーンダヴァの森に火をつけて火の神を満足させました。インドラは、この森に火が放たれたことに激怒して半神たちの力を借り、挑戦してきたアルジュナと一戦を交えます。しかしアルジュナに撃破され、インドラデーヴァは自分の天上の王国に戻っていきました。またアルジュナはマヤースラを必ず守ると約束し、そしてマヤースラはアルジュナに、デーヴァダッタという名高い法螺貝を贈呈しました。インドラデーヴァはアルジュナの騎士道精神に心から満足し、数々の価値ある武器を授けています。

マハーラージ・ユディシュティラがマガダの王・ジャラーサンダを倒せないことに意気消沈していたとき、必ずジャラーサンダを打ち破ってみせる、とユディシュティラ王を慰めたのはアルジュナだけであり、こうしてアルジュナ、ビーマ、主クリシュナがジャラーサンダを殺すためにマガダへ向かいました。また、世界中の王をパーンダヴァ兄弟の従属下に置くために遠征したことがありましたが、それは王座についたあとの皇帝がなすべき任務の一つでもありました。アルジュナはケーリンダという名の国を征服し、バグドゥットウ王を支配下に置きました。そして、アンタギリ、ウルクプル、モーダプルといった国々を巡視し、その支配者すべてを統制下に置きました。

時に、厳しい苦行をすることもあり、のちに、インドラデーヴァから功德を授かっていま

す。主シヴァもアルジュナの力を試したいと考え、土着民の姿に変装してアルジュナに会いました。二人は激しい戦いを繰りひろげ、戦い終えた主シヴァはアルジュナの技量に大いに満足し、自分の姿を現わしました。アルジュナが主にむかって慎ましく祈りをささげると主は喜び、パシュパタの武器を授けました。アルジュナはほかにもさまざまな半神たちから貴重な武器を授かっています。ヤマラージャからはダンダーストラ、ヴァルナからはパシャーストラ、そして天界の管財人であるクヴェーラからはアンタルダナ・アストラを授かりました。インドラはアルジュナに、天界にあって月よりも遠い段階にあるインドラローカ惑星に来てほしいと思いました。アルジュナはその惑星を訪て住人たちから暖かく迎えられ、インドラデーヴァの天界の集まりで歓待され、最後にインドラデーヴァに会いました。インドラデーヴァはアルジュナに軍学を教えました、さらには天国で使われている音楽を教えました。ある意味でインドラはアルジュナのほんとうの父親ですから、間接的に、アルジュナを天界に住むひじょうに美しい女性として名高いウルヴァシーに会わせたいと考えていました。天界の娼婦は情欲が強く、ウルヴァシーは、人類のなかでも最強の人間だったアルジュナと結ばれたいと思っていました。かのじよはアルジュナの部屋でその望みを伝えましたが、アルジュナは非の打ちどころのない高貴な性格そのままに、ウルヴァシーのまへで目を閉じ、かのじよをクル王朝の母と呼び、母のクンティー、マードウリー、インドラデーヴァの妻シヤチャーデーヴィーと同じ立場にいる女性として対応しました。ウルヴァシーは失望し、アルジュナを呪ってその場を去っていきました。天界の惑星にいるとき、偉大で名高い修行僧のローマサに会い、マハーラージ・ユディシュティラを守ってくれるよう祈りました。

敵意をいだく従兄弟のドウリョーダナがガンダルヴァたちに捕らえられたとき、アルジュナはなんとかして助けたいと考え、ドウリョーダナを解放するよう頼みましたが断われます。アルジュナはガンダルヴァたちと戦い、ドウリョーダナを救いだしました。兄弟たちと身を潜めていたアルジュナはヴィラータ王の宮廷で宦官（かんがん）として働き、ウッターラというやがて義理の娘になる女性に、ブリハンナラという名前の音楽教師として音楽を教えていました。ブリハンナラはヴィラータ王の子息であるウッターラのために戦い、身の上を明かさないうままクル兄弟たちを打ち破りました。アルジュナの秘密の武器はソーミの木のなかに安全に隠されていたのですが、ウッターラにその武器を持ってくるよう頼みました。アルジュナや兄弟たちの正体は、のちにウッターラに明らかにされます。ドゥローナーチャーリヤは、クル兄弟たちとヴィラータたちとの戦いにアルジュナがいたことを知らされました。のちのクルクシェートラの戦争では、アルジュナはカルナや多くの将軍たちを多く殺しています。クルクシェートラの戦いが終わったあと、アルジュナはドウラウパディーの5人の子どもを殺したアシュヴァッターマーを懲罰しました。そして、兄弟そろってビーシュマデーヴァのもとへ向かいます。

『バガヴァッド・ギーター』という偉大な哲学的論議がクルクシェートラの戦場で主によ

って語られたのは、ひとえにアルジュナのおかげです。クルクシェートラの戦場でのアルジュナのすばらしい業績は『マハーバーラタ』に生き生きと描写されています。そんなアルジュナでも、マニプラの地で息子のバブルヴァーハナに負けて意識を失い、ウルーピーがアルジュナを助けています。主クリシュナが世を去ったあと、その知らせはアルジュナからマハーラーヂ・ユディシュティラに伝えられました。ふたたびアルジュナはドウヴァーラカーを訪れましたが、未亡人となった主クリシュナの妻たちはかれのまえで嘆き悲しみました。アルジュナはかのじよたちをヴァスデーヴァのもとへ連れていき、慰めまます。のちに、ヴァスデーヴァが他界したとき、アルジュナはクリシュナがいないときに葬式を執行しました。アルジュナがクリシュナの妻たち全員をインドラデーヴァのもとへ連れていく途中攻撃され、自分の保護下にあったかのじよたちを守ることができませんでした。最後に、ヴァーサデーヴァの助言を受けて、兄弟たちはマハープラスタンへ向かいます。途中、兄の助言に従い、持っていた武器すべてを無用の長物として放棄し、ことごとく水のなかに投げいれました。

第 2 2 節

मृगेन्द्र इव विक्रान्तो निषेव्यो हिमवानिव ।
तितिक्षुर्वसुधेवासौ सहिष्णुः पितराविव ॥ २२ ॥

ムリゲンドウラ イヴァ ヴィクラントー
mṛgendra iva vikrānto

ニシェーヴォー ヒマヴァーン イヴァ
niṣevyo himavān iva

ティティクシュル ヴァスデヘーヴァサウ
titikṣur vasudhevāsau

サヒシュヌフ ピタラーヴ イヴァ
sahiṣṇuḥ pitarāv iva

mṛgendraḥ—ライオン; *iva*—~のような; *vikrāntaḥ*—力強い; *niṣevyaḥ*—身をゆだねるにふさわしい; *himavān*—ヒマラヤ山脈; *iva*—~のような; *titikṣuḥ*—忍耐力; *vasudhā iva*—地球のように; *asau*—その子ども; *sahiṣṇuḥ*—寛容な; *pitarau*—両親; *iva*—~のように。

この子は力強さではライオンのように、頼もしさではヒマラヤ山脈のように、忍耐強さでは地球のように、そして寛大さでは両親に匹敵する人物になるだろう。

要旨解説

敵を撃退する強大な力を持つ人物は、よくライオンに比較されます。家にあっては子羊のように、そして敵を追い詰めることではライオンのようにあるべきです。ライオンは必ず獲物をしとめます。国の筆頭者たる人物ならば、そんなライオンのように、必ず敵を撃退しなくてはなりません。ヒマラヤ山脈は、あらゆる富を包括する存在として広く知られています。住むに適した洞穴が散在し、甘いくだものを実らせる木々にあふれ、まるやかな水をたたえる泉、病を治す豊富な薬や鉱物に恵まれています。貧苦にあえぐ人は、すばらしい環境に恵まれたこの山々に安住し、暮らしに必要なものすべてを手に入れることができます。物質主義であろうと精神主義であろうとかまわない、だれでもこの聖なるヒマラヤ山脈に頼ることができるのです。地球のあらゆる場所に、住人たちが引きおこしてしまった問題がいたるところに発生しています。現代人は核爆弾を炸裂させる蛮行をはじめましたが、それでも、母が幼い我が子を許すかのように、地球はじっと耐えています。親は、わんぱくを繰り返す我が子には我慢するものです。理想的な王がこのような優れた美質をそなえているように、幼いパリークシットもやがてあらゆる美質をそなえた人物に成長するだろう、と予言されています。

第23節

पितामहसमः साम्ये प्रसादे गिरिशोपमः ।

आश्रयः सर्वभूतानां यथा देवो रमाश्रयः ॥ २३ ॥

ピターマハ・サマハ サーミエー
pitāmaha-samaḥ sāmye

ブラサーデー ギリショーパマハ
prasāde giriśopamaḥ

アーシュラヤハ サルヴァ・ブフターナーナム
āśrayaḥ sarva-bhūtānām

ヤタハー デーヴォー ラマーシュラヤハ
yathā devo ramāśrayaḥ

pitāmaha—祖父、あるいはブラフマー; *samaḥ*—等しく優れている; *sāmye*—~について; *prasāde*—慈善あるいは寛大さにおいて; *giriśa*—主シヴァ; *upamaḥ*—平衡心の比較; *āśrayaḥ*—拠り所; *sarva*—全員; *bhūtānām*—生命体達の; *yathā*—~として; *devaḥ*—至高主; *ramā-āśrayaḥ*—人格主神。

この子は、祖父のユディシュティラ王やブラフマーに匹敵する穏やかな心を持つ人物にな

る。寛大さでは、カイラーサ丘の主であるシヴァほどに、そして、幸運の女神でさえ身を寄せる至高人格主神ナーラーヤナのように、だれもが拠り所とする人物になるだろう。

要旨解説

穏やかな心をそなえる人物として、マハーラージ・ユディシュティラが、そして全生命体の祖父であるブラフマーが挙げられています。シュリーダラ・スヴァーミーはこの節の「祖父」をブラフマーと解釈していますが、ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーの解釈では、実の祖父であるマハーラージ・ユディシュティラとなっています。しかし、どちらもすばらしい比較であることに変わりありません。至高主の代表者として認められた人物でしたし、全生物の幸福のために穏やかな心を保って働く必要があったからです。統括者としての大役をになう筆頭者は、相手がどのような攻撃をしかけても忍耐強く対応しなくてはなりません。ゴピーたちの不満の矛先は、この宇宙の創造者である主ブラフマーが、主クリシュナを見るのを遮るまぶたを作ったことにあります。ほんの一瞬のまばたきが、愛する主クリシュナへの視界を遮ることに我慢できなかったのです。ならば、どの責任者がなにをしてもいちいち難癖をつける人間には耐えるしかありません。同じように、マハーラージ・ユディシュティラは敵が引きおこした数々の窮地を乗り越えなくてはなりませんでしたが、どんな境遇に置かれても、完全な平衡心を保つ模範をしめしました。ですから、心の平衡を保つことで挙げられた二人の祖父の例は、じつに適切です。

主シヴァは物乞いにも恩恵を授ける名高い半神です。その気質ゆえに、アーシュトージャ (Āśutoṣa) 「たやすく喜ばせられる者」という意味の名前で知られています。またブータナータ (Bhūtanātha) という別名は、のちに発生する結果を考慮せずに寛大な贈り物を授ける質を指しますが、ほとんどの従者はそのような主シヴァに執着しています。ラーヴァナは主シヴァに強く執着していましたが、主シヴァをかたんに喜ばせたことで、主ラーマという権威者に挑戦するほどの力をそなえるようになりました。もちろん、至高人格主神ラーマと戦っても主シヴァの助けは得られませんでした。戦った相手は主シヴァの主だったのですから。主シヴァはヴリカースラにじつに不便でやっかいな恩恵を授けています。ヴリカースラは主シヴァの恩寵を授かり、相手の頭にさわるだけで殺してしまう力を手にいれました。主シヴァから授かった力ですが、狡猾なこの男はその威力を試そうと、主シヴァの頭に触れようとしました。このため主シヴァは主ヴィシュヌにすがるのはめになり、主ヴィシュヌは相手を幻惑に落としいれる力を使い、「まずご自分で試されるのがいいでしょう」と言いくるめます。この男はその言葉を信じて自分の頭にさわり、そして命を落としました。そして世界は、半神から物乞いをする狡猾な男が作りだすさまざまな問題から救われました。この話の要点は、主シヴァはどんな人間にも恩寵を授けるということにあります。ですから主シヴァは（ときに問題が生じることはあるのですが）、もっとも寛大な人物として知られて

います。

ラマー (Ramā) は「幸運の女神」という意味です。女神が慕う相手は主ヴィシュヌ、そして主ヴィシュヌは全生命体を維持する方です。生命体の数は無数です。住んでいるのは地球だけではありません、他の無数の惑星上にも住んでいます。そのすべての生命体が、「自己の悟り」という最終目標に高められる道を歩くに必要なものすべてを授かっていますが、感覚満足の道を選べば、マーヤーという幻想の力のために苦しい生活を強いられ、その結果、経済発展という間違った計画の道を歩くようになります。そのような経済発展はぜったいに達成できません。幻にすぎないからです。かれらはいつも幻の幸運の女神にすがっているのですが、幸運の女神はヴィシュヌだけに守られていることを知りません。ヴィシュヌ抜きにした幸運の女神は幻です。ですから私たちがすがれる相手は幸運の女神ではなく、ヴィシュヌその方なのです。ヴィシュヌとヴィシュヌの献愛者だけが全生命体を守ることができるのであり、マハーラージャ・パリークシットもヴィシュヌに守られていたからこそ、自分の統治を望む市民たちを守ることができるのは当然でした。

第 2 4 節

सर्वसद्गुणमाहात्म्ये एष कृष्णमनुव्रतः ।
रन्तिदेव इवोदारो ययातिरिव धार्मिकः ॥ २४ ॥

サルヴァ・サドゥ・グナ・マーハートウミエー
sarva-sad-guṇa-māhātmye

エーシャ クリシュナンム アヌヴラタハ
eṣa kṛṣṇam anuvrataḥ

ランティデーヴァ イヴォーダーロー
rantideva ivodāro

ヤヤーティル イヴァ ダハールミカハ
yayātir iva dhārmikaḥ

sarva-sat-guṇa-māhātmye—あらゆる神聖な特質ゆえに讃えられて; eṣaḥ—この子ども; kṛṣṇam—主クリシュナのような; anuvrataḥ—主の足跡に従う者; rantidevaḥ—ランティデーヴァ; iva—~のような; udāraḥ—寛大さにおいて; yayātiḥ—ヤヤーティ; iva—~のような; dhārmikaḥ—宗教に関して。

この子は、主の足跡に従うことでは主シュリー・クリシュナに匹敵する者となる。寛大さでは、ランティデーヴァ王にまさるとも劣らない。そして宗教心では、マハーラージャ・ヤヤーティに並び立つ。

要旨解説

主シュリー・クリシュナが説く『バガヴァッド・ギーター』の最後の教えは、「すべてを捨て、主の足跡だけに従う」という点にあります。知性に欠ける人々は、主のこの偉大な教えに同意しません。じつに不運なことではありますが、賢い人はこの崇高な教えを受け入れ、すぐに恩恵を授かることができます。愚かな人々は、人とのつきあいをとおして特定の質が作られることを知りません。物体も同じで、火に触れた物は熱くなります。ですから、至高人格主神とのふれあう人も、主のような特質をそなえるようになります。先に述べたように、主との親密な交流をとおして神聖な気質の78%を得ることができます。主の教えに従うことが主と交流する、ということです。目のまえにいてこそ交流ができる——主はそのような物質的な存在ではありません。主はどこにでも、いつでも存在しています。主の教えに従って主と交流できます。主と主の教え、主と主の名前・名声・特質・主に関わる物事は、絶対的な知識だからこそ、主とまったく同じなのです。マハーラージャ・パリークシットは、母親の胎内にいるときから、その価値ある生涯最後の日まで主とふれあい、主の優れた気質を完璧にそなえることができました。

ランディデーヴァ (Rantideva) 『マハーバーラタ』時代以前のいにしえの王。『マハーバーラタ』(ドゥローナ・パルヴァ 第67節)で、ナーラダ・ムニがサンジャヤに教えを説いているときに言及した人物です。偉大な王で、客人を厚くもてなし、惜しみなく食糧を分けあたえました。主シュリー・クリシュナでさえ、その慈善と歓待の心を称讃しました。偉大な聖者ヴァシシュタ・ムニに冷たい水を捧げ、返礼として天国の惑星に高められる恩恵を授かりました。またリシたちにくだもの、根、葉を捧げ、返礼として望みを満たす祝福をかれらから授かっています。クシャトリヤとして生まれましたが、生涯肉を口にすることがありません。とりわけヴァシシュタ・ムニを手厚くもてなし、ムニの祝福だけで高位の惑星に住めるようになりました。朝夕思いおこすべく敬虔な王の一人に数えられています。

ヤヤーティ (Yayāti) 世界に名の知れた偉大な皇帝であり、アーリヤンに属する優れた国やインド・ヨーロッパ語族の祖先です。マハーラージャ・ナブシャの子息で、兄が解放された偉大な神秘家であったことから、世界の皇帝になりました。若いころには欲情が強く、かれにまつわるさまざまな恋物語がありますが、数千年間世界を治め、歴史に残る数多くの儀式や敬虔なおこないをしています。あるとき、シュクラチャーリヤが深く愛する娘デーヴァヤーニーに恋をしました。デーヴァヤーニーは結婚を望んでいたのですが、ヤヤーティはブラーフマナの娘だったかのじよの申し出を断りました。シャーストラの決まりでは、ブラーフマナはクシャトリヤの娘と結婚できますが、クシャトリヤはブラーフマナの娘と結婚できないことになっています。世界にヴァルナ・サンカラが増えないよう配慮されていたのです。シュクラチャーリヤはこの禁じられた結婚を改め、皇帝ヤヤーティにデーヴァヤ

ーニーをめとるよう促しました。デーヴァヤーニーにはシャルミシュターという女性の友だちがいましたが、その女性が皇帝と恋に落ち、デーヴァヤーニーと皇帝に会いに行きました。シュクラチャーリヤは、皇帝がシャルミシュターを寝室に呼ぶことを禁じましたが、ヤヤーティはその命令に正しく従うことができませんでした。そして密かにシャルミシュターと結婚し、息子をもうけました。このことを知ったデーヴァヤーニーは怒り、父親に訴えます。ヤヤーティはデーヴァヤーニーに強く執着しており、義理の父シュクラチャーリヤの宮殿に趣きました。シュクラチャーリヤはヤヤーティの行状に怒り、不能になるよう呪いをかけました。ヤヤーティはその呪いを取りけすよう訴えますが、性的能力を取りもどすためには息子たちから若さを得て、かれらが老人になる、という条件をつきつけました。ヤヤーティはデーヴァヤーニーとのあいだに2人、シャルミシュターとのあいだに3人、計5人の子息をもうけています。この5人、すなわち(1)ヤドウ、(2)トゥルヴァス、(3)ドウルヒユ、(4)アヌ、(5)プールから、5つの名高い家系すなわち(1)ヤドウ王家、(2)ヤヴァナ家(トルコ人)、(3)ボージャ王家、(4)ムレッチャ王家(ギリシャ人)、(5)パウラヴァ王家が起り、世界各地に広がっていききました。ヤヤーティは敬虔なおこないをしたことで天国の惑星に昇っていきましたが、あまりの自画自賛、そして偉大な魂たちへの冒瀆のため地上に転落しました。ヤヤーティが墮落したあと、娘と孫息子は自分たちが積んだ美德をヤヤーティに譲り、孫息子と友人のシビに助けられて天国の惑星に高められ、いまではヤマラージャの行政府一人として、また献愛者としてヤマラージャとともに暮らしています。ヤヤーティ王は1,000以上のさまざまな儀式を執行し、惜しみなく慈善をほどこし、強い影響力を行使した人物です。その威厳に満ちた力は世界中の住民が感じていました。ヤヤーティの末の子プールは、ややーディが欲情に端を発した問題に見まわれたとき、自分の若さを1,000年も与えることに同意しました。やがて俗生活から離れるとき、その若さをプールにふたたび戻しました。王国をプールに譲りたかったのですが、他の貴族や臣下たちが認めませんでした。しかし、プールの偉大さを聞いたかれらは、プールを国王とすることに同意し、こうして皇帝ヤヤーティは家族生活から離れて森に入っていきました。

第25節

धृत्या बलिस्मः कृष्णे प्रहाद इव सद्ग्रहः ।
आहर्तैषोऽश्वमेधानां वृद्धानां पर्युपासकः ॥ २५ ॥

ドフウリチャー バリ・サマハ クリシュネー
dhṛtyā bali-samaḥ kṛṣṇe

プラーダ イヴァ サドウ・グラハハ
prahrāda iva sad-grahaḥ

アーハルタイショー シュヴァメーダハーナーンム
āhartaiṣo 'śvamedhānām

ヴリッダハーナーンム パリユパーサカハ
vṛddhānām paryupāsakaḥ

dhṛtyā—忍耐心で; bali-samaḥ—バリ・マハーラージャのように; kṛṣṇe—主シュリー・クリシュナに; prahrāda—プラフラーダ・マハーラージャ; iva—~のように; sat-grahaḥ—~の献愛者; āhartā—執行者; eṣaḥ—この子ども; aśvamedhānām—アシュヴァメーダの儀式の; vṛddhānām—老いて経験豊かな人々の; paryupāsakaḥ—従者。

この子は、バリ・マハーラージャのように忍耐強く、プラフラーダ・マハーラージャのように堅固な主クリシュナの献愛者となり、多くのアシュヴァメーダ儀式を執行し、そして老いて経験豊かな人物たちの従者となるだろう。

要旨解説

バリ・マハーラージャ (Bali Mahārāja) 主への献愛奉仕における12人の権威者の一人。主を満足させるためにすべてを犠牲にしたこと、そしてなにもかも主に捧げる選択をやめさせようとした名ばかりの精神指導者を捨てたことが、献愛奉仕の偉大な権威者となった理由です。宗教生活の最高完成は、二心のない、そして一般社会とのかかわりに巻き込まれることのない主への無条件の献愛奉仕をすることで達成されます。バリ・マハーラージャは、主を満足させるためならなにがあってもかまわない、と決断しました。主の献愛奉仕上の権威者の一人であるプラフラーダ・マハーラージャの孫にあたる人物です。バリ・マハーラージャと、またそのヴィシュヌ・ヴァーマナデーヴァとの関係の歴史については、『シュリーマド・バーガヴァタム』の第8編 (第11–24章) で述べられています。

プラフラーダ・マハーラージャ (Prahāda Mahārāja) 主クリシュナ (ヴィシュヌ) の理想的な献愛者。父ヒラニヤカシプと母カヤードウの長男にあたる人物です。ヒラニヤカシプは、たった5歳のプラフラーダ・マハーラージャを厳しく咎めましたが、そのわけは我が子が主の純粋な献愛者になったことにあります。主への献愛奉仕の権威者になった理由は、父親が主ヌリシンハデーヴァに殺害され、たとえ父親であっても献愛奉仕のさまたげになるのであれば拒否しなくてはならない、という見本をしめしたからです。4人の子息がいましたが、その長男はヴィローチャナ、すなわち先に述べたバリ・マハーラージャの父親です。プラフラーダ・マハーラージャの行動の歴史については『シュリーマド・バーガヴァタム』の第7編で述べられています。

第26節

राजर्षीणां जनयिता शास्ता चोत्पथगामिनाम् ।
निग्रहीता कलेरेष भुवो धर्मस्य कारणात् ॥ २६ ॥

ラーज्यルシーナーンム ジャナイター
rājarṣīṇām janayitā

シャースター चोर्टウパタハ・ガーミナーンム
śāstā cotpatha-gāminām

ニグラヒーター カレール エーシャ
nigrahītā kaler eṣa

ブフヴォー ダハルマツシャ カーラナートウ
bhuvo dharmasya kāraṇāt

rāja-ṛṣīṇām—聖者とも言うべき王達の; *janayitā*—製作者; *śāstā*—懲罰者; *ca*—そして; *utpatha-gāminām*—横柄な者達の; *nigrahītā*—人を悩ませる者; *kaleḥ*—喧嘩好きな者の; *eṣaḥ*—これ; *bhuvah*—世界の; *dharmasya*—宗教の; *kāraṇāt*—～の理由で。

この子は、聖者のようになる王たちの父となるだろう。世界の平和と宗教のために、成り上がり者や争いを好む者たちの懲罰者となるだろう。

要旨解説

世界でもっとも賢い人物は主の献愛者です。聖者は賢い人物とも呼ばれ、さまざまな知識をそなえた多彩な賢者がいます。ですから、国王あるいは国の筆頭者が賢くなければ、国内にいるさまざまなタイプの賢者を導くことはできません。マハーラージャ・ユディシュティラの家系にある王家を継いでいるのは、例外なく、当時もっとも賢いとされていた人物たちばかりであり、まだこの時生まれていなかったマハーラージャ・パリークシットや、その子息であるマハーラージャ・ジャナメージャヤについても予言されています。そのような賢い王が、カリ時代にいる成り上がり者や世を荒廃させる者を懲罰することができます。後の章で明確にされるように、マハーラージャ・パリークシットは、平和と宗教の象徴である雌牛を殺そうとしていたカリの権化を殺そうとしました。カリ時代の兆候は、(1)酒、(2)女性、(3)賭博、(4)屠殺場です。すべての国にいる賢い支配者は、マハーラージャ・パリークシットから教訓を学び、酒・女性との不義の性的関係・賭博、さらには正式に経営されている屠殺場が供給する肉を食べることにふけている成り上がり者や争いを好む者たちを制圧することで、平和や道徳律を守らなくてはなりません。カリという現代では、このような多岐にわたる争いを維持させる正式な許可証が用意されています。これでは、国のなかに平和や道徳律が期待できないのは当然です。ゆえに国の長老たちは、先に挙げたように、規則を破る者たちを罰して争いの兆しを根絶することで、主への奉仕によって賢くなる原則に従わ

なくてはなりません。火をおこすには乾いた燃料が必要です。燃えさかる火と湿った燃料は相いれません。平和と道德律は、マハーラージャ・パリークシットとその従者たちの原則に従う以外に達成できるものではありません。

第27節

तक्षकादात्मनो मृत्युं द्विजपुत्रोपसर्जितात् ।
प्रपत्स्यत उपश्रुत्य मुक्तस्राः पदं हरेः ॥ २७ ॥

タクシャカードウ アートウマノー ムリテユンム
takṣakād ātmano mṛtyum

ドゥヴィジャ・プトウローパスアルジタートウ
dvija-putropasarjitāt

プラパトウツシャタ ウパシュルテヤ
prapatsyata upaśrutya

ムクタ・サンガハ パダンム ハレーヘ
mukta-saṅgaḥ padam hareḥ

takṣakāt—スネークバードによって; *ātmanaḥ*—自分自身の; *mṛtyum*—死; *dvija-putra*—ブラーフマナの子息によって; *upasarjitāt*—〜に送られて; *prapatsyate*—〜に身をゆだねて; *upaśrutya*—聞いた後; *mukta-saṅgaḥ*—すべての執着を捨てて; *padam*—立場; *hareḥ*—主の。

ブラーフマナの子息が向かわせたスネークバードに噛まれて死ぬ、という呪いを聞いたかれは物質的執着すべてを捨てさり、人格主神に保護を求め、身をゆだねるだろう。

要旨解説

物質的な執着と主の蓮華の御足に身をゆだねることは共存しません。物質的な執着を持っていれば、主に守られて得られる超越的な幸福はわかりません。物質界にいながらおこなう主への献愛奉仕は、主との超越的な絆を築く修練をする、ということであり、その結果、物質的な執着をすべて捨てさり、ふるさとへ、神のもとへ帰る資格を得ることができるようになります。マハーラージャ・パリークシットは母親の胎内にいたときから主のことだけを考えていたため絶えず主に守られており、かれにとって、ブラーフマナの子息に呪われてから7日後に死ぬという警告は、ふるさとに、神の元に帰る準備ができるという恩恵でもありました。いつも主に守られていた人物ですから、主の恩寵の力で呪いを消滅させることもできましたが、むやみにそのような力を使うことはしませんでした。逆に、不利な状況に追いこ

まれても最善をつくしたのです。正しい情報源から『シュリーマド・バーガヴァタム』を7日間つづけて聞きつづけ、この機を利用して主の蓮華の御足に身をゆだねました。

第28節

जिज्ञासितात्मयाथार्थ्यो मुनेर्व्यासमुतादसौ ।
हित्वेदं नृप ग्रायां यास्यत्यद्वाकुतोभयम् ॥ २८ ॥

ジギヤーシタートウマ・ヤタハールテヨー
jijñāsītātma-yāthārthyo

ムネール ヴヤーサ・スタードウ アサウ
muner vyāsa-sutād asau

ヒトウヴェーダンム ヌリパ ガンガーヤーンム
hitvedam nṛpa gaṅgāyām

ヤッシャーティ アッダハークトーバハヤンム
yāsyaty addhākutobhayam

jijñāsita—～について尋ねて; *ātma-yāthārthyah*—自己に関する正しい知識; *muneḥ*—その博学な哲学者から; *vyāsa-sutāt*—ヴァーサの子息; *asau*—彼; *hitvā*—終えること; *idam*—この物質的な執着; *nṛpa*—王よ; *gaṅgāyām*—ガンジス川の岸辺で; *yāsyati*—行くだろう; *addhā*—直接に; *akutaḥ-bhayam*—恐れのない生活。

ヴァーサデーヴァの子息で、偉大な哲学者になるであろう人物から正しい自己の悟りの知識について聞いたあと、物質的執着をすべて捨てさり、恐れを知らない生活の境地を達成することであろう。

要旨解説

物質的知識とは、自分自身に関する知識を知らない、ということです。そして哲学とは、自分に関する正しい知識、あるいは自己を悟るための知識を探求する、という意味でもあります。自己の悟りに結びつかない哲学は、無味乾燥で、時間とエネルギーの無駄にすぎません。『シュリーマド・バーガヴァタム』はその「自分自身に関する正しい知識」を提供し、『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くことで、物質的な執着から解放され、恐れのない国に入ることができます。物質界は恐怖に満ちた世界です。そのなかに住む生命体たちは、刑務所に収監された囚人たちのように恐れおののいています。刑務所では、だれも刑務所の規則を破ることはできませんし、破れば刑期をさらに拘留期間を延期されるばかりです。同じように、物質存在に閉じこめられている私たちはいつも怯えています。これが「不安」と

呼ばれるものです。物質界にいる人はだれでも、どのような生物でも、どのような生活でも、たとえ自然界の法則を破ろうと破るまいと、いつも不安にかられています。解放・ムクティ (*mukti*) とは、途切れることのないこの不安から解放です。その解放は、主に仕えることで不安が解消されることで実現します。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、私たちがかかえていた物質的不安を精神的喜びに変えてくれます。これは、シュリー・ヴァーサデーヴァの偉大な子息で、自己を悟ったシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような博学な哲学者とのふれあいがなければ実現されません。マハーラージャ・パリークシットは、「もうすぐ死ぬ」という警告を受けたあと、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとの交流をとおしてその機会を活用し、待ち望んでいた結果を得ることができました。

『シュリーマド・バーガヴァタム』を吟唱したり聞いたりすることでは、生計をたてるためにそのような吟唱や傾聴を模倣する者たちがおり、愚かな聴衆はその模倣者に従えば、執着という束縛から解放され、恐れずに暮らせるようになると考えています。これはこっけいな物まねに過ぎないため、いつまでも物欲を満たすことしか頭のない愚かで貪欲な輩のバーガヴァタ・サプターハ (*bhāgavatam saptāha*) に惑わされてはなりません。

第 29 節

इति राज्ञ उपादिश्य विप्रा जातककोविदाः ।
लब्धापचितयः सर्वे प्रतिजग्मुः स्वकान् गुहान् ॥ २९ ॥

イティ ラーギヤ ウパーディッシャ
iti rājña upādiśya

ヴィプラー ジャータカ・コーヴィダーハ
viprā jātaka-kovidāḥ

ラブダハーパチタヤハ サルヴェー
labdhāpacitayaḥ sarve

プラティジャグムフ スヴァカーン グリハーン
pratijagmuḥ svakān gṛhān

iti—このように; *rājñe*—王に; *upādiśya*—助言して; *viprāḥ*—ヴェーダに精通した人々; *jātaka-kovidāḥ*—占星術と誕生の儀式の執行に長けた人々; *labdha-apacitayaḥ*—報酬として豊富に受けとった人々; *sarve*—彼らすべて; *pratijagmuḥ*—戻って行った; *svakān*—彼ら自身の; *gṛhān*—家。

このように、占星術の知識と誕生の儀式に長けた人々がユディシュティラ王に、その子の将来について教えた。やがて十分な報酬を授かったあと、各自の住まいにもどっていった。

要旨解説

ヴェーダは、物質・精神両知識の宝庫です。しかし、この知識は自己を悟るために向けられなくてはなりません。言いかえれば、ヴェーダはあらゆる面で教養ある文化人に用意された案内書なのです。人間生活は物質的な苦しみから逃れる機会ですから、ヴェーダの知識に従うことで、生活必需品と精神的解放どちらについても正しい助言が得られます。ヴェーダの知識の研究に専心している人々をヴィプラ（ヴェーダ知識の専門家）といいます。ヴェーダには広範な分野があり、なかでも占星学と病理学は一般人に欠かせない重要な学問です。ですから知的な人物であるブラーフマナは、社会を導くためにさまざまなヴェーダ知識を研究します。博識な人々は軍学（ダヌル・ヴェーダ *Dhanur-veda*）でさえ学び、ヴィプラのなかには、ドゥローナーチャーリヤやクリパーチャーリヤをはじめとする熟達者がいました。

この節にあるヴィプラ (*vipra*) という言葉には重要な意味がこめられています。ヴィプラとブラーフマナにはちょっとした違いがあります。ヴィプラはカルマ・カーンダ、すなわち果報的活動に関する知識を習熟した人々のことで、大衆が何不自由なく暮らせるよう導きますが、ブラーフマナは崇高な精神的知識を知りつくしている人々を指します。この知識の分野をギャーナ・カーンダ (*jñāna-kāṇḍa*) といい、この上にウパーサナー・カーンダ (*upāsana-kāṇḍa*) があります。ウパーサナー・カーンダの極致が主ヴィシュヌへの献愛奉仕であり、極致をきわめたブラーフマナがヴァイシュナヴァと呼ばれるようになります。さまざまな崇拜様式のなかでも、ヴィシュヌの崇拜はもっとも気高いものとされています。高尚なブラーフマナは主への崇高な愛情奉仕に励むヴァイシュナヴァであるため、献愛奉仕の科学を説く『シュリーマド・バーガヴァタム』はヴァイシュナヴァにはひじょうに重要な書物です。そして『シュリーマド・バーガヴァタム』がまさきに述べるように、この書物はヴェーダ知識の熟した果実であり、カルマ、ギャーナ、ウパーサナーという3つのカーンダより優れた主題を扱っています。

カルマ・カーンダの専門家には、ジャータカと呼ばれる熟達したヴィプラたちがおり、かれらは誕生した時間 (*lagna*・ラグナ) の星座を計算するだけで赤ん坊の未来をすべて言いあてる優秀な占星術師です。この優れたジャータカ・ヴィプラたちがマハーラージャ・パリークシットの誕生に居あわせ、祖父のマハーラージ・ユディシュティラはかれらに十分な金、土地、村、穀物、また牛などの貴重な生活必需品を与えました。社会にはヴィプラが必要であり、国はヴィプラの快適な暮らしを保証しなくてはなりません。熟達したヴィプラは国からの十分な報酬を得ているからこそ無償で一般大衆に仕えることができ、こうして、ヴェーダの知識がだれにでももたらされる社会環境が作りだされるのです。

第30節

स एष लोके विख्यातः परीक्षिदिति यत्प्रभुः ।
पूर्वं दृष्टमनुध्यायन् परीक्षेत नरेष्विह ॥ ३० ॥

サ エーシャ ローケー ヴィキヤータハ
sa eṣa loke vikhyātaḥ

パリークシドゥ イティ ヤトウ プラブフ
parikṣid iti yat prabhuḥ

プールヴァンム ドウリシュタンム アヌデヤーヤン
pūrvam dṛṣṭam anudhyāyan

パリークシェータ ナレーシュヴ イハ
parikṣeta nareṣv iha

sah—彼; eṣaḥ—この中の; loke—世界; vikhyātaḥ—有名な; parikṣit—検査する者; iti—このように; yat—何; prabhuḥ—王よ; pūrvam—～の前; dṛṣṭam—見られる; anudhyāyan—常に熟考している; parikṣeta—検査するだろう; nareṣu—すべての人に対して; iha—ここで。

その子は、パリークシット、すなわち「見定める者」として世界に知れわたることだろう。生まれるまえに見た人物を探しもとめ、出会う人すべてを見定めようとするからである。このようにして、いつも主を黙想する人物になるだろう。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは幸運な人物でしたから、母親の胎内にいたときでさえ主の姿を見ることができ、それ以来、主への深い想いが心から離れることはありませんでした。主の崇高な姿がひとたび心に焼きつけられると、その姿はなにがあっても忘れることはできません。パリークシットは母親の体から出たあと、出会う人すべてを、胎内で見た同じ人物かどうか見定める習慣がついていました。しかしだれにあっても、その人物ではありませんでしたし、その人物よりも魅力的ではなかったことから、だれも受け入れることはありませんでした。それでも主は、相手を見きわめようとしているパリークシットと共にあり、こうしてかれは思いだすことでいつも主に献愛奉仕をしていたのでした。

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、どのような子でも、幼いころに主の姿を心に焼きつければ、やがてマハーラージャ・パリークシットのような偉大な献愛者になる、と言っています。主を母親の胎内で見るとの幸運にはめぐまれないかもしれませんが、両親がそう望めば可能性はあります。筆者自身の体験を挙げましょう。父は主の純粋な献愛者で、私が4歳か5歳のときにラーダーとクリシュナの像を用意してくれました。遊んでいるよう

な気持ちで、妹とよくその神像を崇拜し、また近くにあったラーダー・ゴヴィンダ寺院での儀式などをよく真似ていたものです。この寺院に何度も行くことで、私は主への自然な親近感を高めていきました。父は私の年齢にふさわしい儀式もすべて教えてくれています。学校や大学で学ぶようになると、そのような習慣はすっかり忘れてしまいました。しかし青年になって、私の精神指導者シュリー・シュリーマドゥ・バクティシッダーンタ・サラスヴァティー・ゴースヴァーミー・マハーラージャに会ってから、昔いそしんでいた記憶がよみがえり、当時は遊びの相手だった神像が、正式な規則に従って崇拜する神像になりました。家族との関係を断つまでこの習慣はつづき、寛大な父が最初に主の像を私に与え、のちに尊師に導かれて正式な献愛奉仕へと高まっていったことを思えば、大きな喜びを感じずにはいられません。プラフラダ・マハーラージャもそのように助言しています。神聖な絆を築く主の姿は幼いころから心に刻むべきものであり、それができなければ、他の体と同じように人間の体も一時的ではあっても、「人間の生涯」という絶好の機会を見逃してしまうのです。

第31節

स राजपुत्रो ववृधे आशु शुचा इवोदुपः ।
 आपूर्यमाणः पितृभिः काष्ठाभिरिव सोऽन्वहम् ॥ ३१ ॥

サ ラージャ・プトウロー ヴァヴリデヘー
 sa rāja-putro vavṛdhe

アーシュ シュクラ イヴォードウパハ
 āśu śukla ivodupaḥ

アープーリヤマーナハ ピトウリビヒ
 āpūryamāṇaḥ pitṛbhiḥ

カーシュタハービヒル イヴァ ソー ンヴァハンム
 kāṣṭhābhir iva so 'nvaham

saḥ—その; rāja-putraḥ—その王子; vavṛdhe—成長した; āśu—やがてすぐに; śukle—満ちている月; iva—~のように; udupaḥ—月; āpūryamāṇaḥ—豊富に; pitṛbhiḥ—両親の守護のもとで; kāṣṭhābhiḥ—完全な発達; iva—~のような; saḥ—彼; anvaham—日ごとに。

月が2週間をかけて日ごとに満ちていくように、この王子(パリークシット)は、やがて、守護者である祖父たちの心遣いと完全な配慮に支えられて、心豊かに育っていくことだろう。

第32節

यक्ष्यमाणोऽश्वमेधेन ज्ञातिद्रोहजिहासया ।
 राजालब्धधनो दध्यौनान्यत्र करदण्डयोः ॥ ३२ ॥

ヤクッシャマーノー シュヴァメーデーナ
yakṣyamāṇo 'śvamedhena

ギヤーティ・ドゥローハ・ジハーサヤー
jñāti-droha-jihāsayā

ラージャー ラブダハ・ダハノー ダデヤウ
rājā labdha-dhano dadhyau

ナーニヤトウラ カラ・ダンダヨーホ
nānyatra kara-daṇḍayoḥ

yakṣyamāṇaḥ—執行することを望んでいる; *aśvamedhena*—馬の供儀祭によって;
jñāti-droha—親族と戦うこと; *jihāsayā*—～から逃れるために; *rājā*—ユディシュティラ王;
labdha-dhanaḥ—富を得るために; *dadhyau*—～について考えた; *na anyatra*—別の方法;
kara-daṇḍayoḥ—税金と罰則金。

ちょうどこのころユディシュティラ王は、親族との戦いによって生じた罪から免れるため、馬の供儀祭を執行することを考えていた。しかし、罰則金や税の徴収を除いて、王には余剰資金がなく、ある程度の財産を獲得する必要性を感じていた。

要旨解説

ブラーフマナやヴィプラたちが国から援助を受ける資格があるように、国の執行部は市民から税や罰則金を徴収する権利があります。クルクシェートラの戦いが終わり、国の財源は底をつき、そのため税金や罰則金以外に余剰資産はありませんでした。その資金は国の予算だけにしか使うことができず、王は馬の供儀祭を執行するために別の財源を得ることを考えていました。マハーラーヂ・ユディシュティラは、この儀式をビーシュマデーヴァの教えに従って執行したいと思っていたのです。

第33節

तदभिप्रेतमालक्ष्य भ्रातरोऽच्युतचोदिताः ।
धनं प्रहीणमाजहरुदीच्यां दिशि भूरिशः ॥ ३३ ॥

タドゥ アビヒプレータンム アーラクッシャ
tad abhipretam ālakṣya

ブラータロー チュタ・チョーディターハ
bhrātaro 'cyuta-coditāḥ

ダハナンム プラヒーナンム アージャフルル
dhanam prahīṇam ājāhūrur

ウディーチャーンム ディシ プフーリシャハ
udīcyām diśi bhūriśaḥ

tat—彼の; *abhipretam*—心の願い; *ālakṣya*—見ている; *bhrātaraḥ*—彼の兄弟達; *acyuta*—完全無欠の者(主シュリー・クリシュナ); *coditāḥ*—〜の助言を受けて; *dhanam*—富; *prahīṇam*—収集; *ājahruḥ*—〜を持ってきた; *udīcyām*—北部; *diśi*—方角; *bhūriśaḥ*—充分な。

兄弟たちは、王の愛情あふれる願いを察し、完全無欠の主クリシュナの助言を受けて、北部地方から(マルッタ王が残っていた)充分な財産を集めてきた。

要旨解説

マハーラージャ・マルッタ (*Mahārāja Marutta*) 偉大な皇帝の一人。マハーラージ・ユディシュティラの統治時代を遡る時代の世界の王でした。マハーラージャ・アヴィクシットの子息で、太陽神の子、すなわちヤマラージャの偉大な献愛者です。兄弟のサンヴァルタは、半神を率いる博識な僧侶であるブリハスパティと対抗していました。サンカーラ・ヤギヤと呼ばれる儀式で主を大いに満足させ、主はある黄金の山の管理をまかせました。この山はヒマラヤ山脈に位置していますが、現代の冒険家はその場所を捜しあてることができるかもしれません。絶大な力をそなえた皇帝だったことから、儀式の最終日には、インドラ、チャンドラ、ブリハスパティなど、他の惑星から半神たちがかれを訪ねてきています。黄金の山を管理する皇帝はありあまる金を蓄えていました。儀式の場所にある天蓋(てんがい)全体が純金で作られていたほどです。また毎日行なわれていた儀式には、儀式用の料理をはかどらせるためにヴァーユローカ(空気の惑星)の住民が招かれ、儀式に集まった半神たちはヴィシュヴァデーヴァによって率いられていました。

マルッタ王は敬虔なおこないを続け、治めていた王国にあった病気をことごとく根絶することができました。王が行なった盛大な供儀祭には、デーヴァローカやピトゥリローカのような高位の惑星に住む住民のだれもが満足していました。王は毎日のように博学なブラーフマナたちに、寝具、座席、乗り物、充分な量の金などを与えました。天界の王インドラデーヴァもその寛大な慈善や無数の供儀祭に心から満足し、王の隆盛を望んでいました。敬虔なおこないを積んだことで、生涯をつうじて若々しい容姿で生きつづけ、満足しきった臣下、大臣、嫡妻、子息、兄弟たちに囲まれて1,000年間王国を治めました。主シュリー・クリシュナでさえ、その敬虔なおこないを讃えています。一人娘をマハルシ・アンギラーという聖者に嫁がせ、聖者の祝福を授かって天界に昇っていきました。王は博識なブリハスパティに自分の儀式を司る僧侶になってほしかったのですが、半神だったブリハスパティは、王が地球の人間だったため、申し入れを断りました。願いが聞きいれられず、たいそう失望はし

たのですが、ナーラダ・ムニの助言を受けてサンヴァルタをその地位に就け、サンヴァルタはその使命をまっとうしました。

儀式の成功は執行する僧侶にかかっています。現代では儀式はどれも禁止されていますが、それは、ブラーフマナと名乗ってもじつはその資質がなく、「ブラーフマナの子息だからブラーフマナ」と誤解している者たちが多くはびこり、真に博識なブラーフマナがいないためです。ですから、いまのかり時代ではただ1つの儀式、すなわち主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブによって始められたサンキールタナ・ヤギャだけが勧められています。

第34節

तेन सम्भृतसम्भारो धर्मपुत्रो युधिष्ठिरः ।
वाजिमेधैस्त्रिभिर्भितो यज्ञैः समयजद्वरिम् ॥ ३४ ॥

テーナ サンブハリタ・サンバハーロー
tena sambhṛta-sambhāro

ダハルマ・プトウロー ユデヒシュティラハ
dharma-putro yudhiṣṭhiraḥ

ヴァージメーダハイス トウリビヒル ビヒートー
vājimedhais tribhir bhīto

ヤギヤイヒ サマヤジャドゥ ダハリナム
yajñaiḥ samayajad dharim

tena—その富で; *sambhṛta*—集めた; *sambhāraḥ*—物資; *dharma-putraḥ*—敬虔な王; *yudhiṣṭhiraḥ*—ユディシュティラ; *vājimedhaiḥ*—馬の供儀祭によって; *tribhiḥ*—3回; *bhītaḥ*—クルクシェートラの戦闘後、非常に恐れている; *yajñaiḥ*—儀式; *samayajat*—完璧に崇拜した; *harim*—人格主神。

王は、その富を使って馬の供儀祭を3回執行することができた。こうして、クルクシェートラの戦いが集結したあとに恐れをいっていた敬虔な王ユディシュティラは、主ハリ、人格主神を喜ばせることができたのである。

要旨解説

マハーラーヂ・ユディシュティラは理想的かつ名高い敬虔なる世界の王でしたが、クルクシェートラの戦いに参戦し、また発生した大殺戮のために計りしれない恐怖心に襲われていました。自分を王座に就けるためだけに為された戦争だったからです。ですから、戦争ゆえに起こった惨事すべての責任を負い、その罪をすべて打ち消すために、馬の供儀祭を3回執

行したいと考えていました。その儀式には膨大な費用が必要になります。そのためマハーラーヂ・ユディシュティラでさえ、マハーラーヂャ・マルツタから、そしてマルツタ王から慈善として金を受けとったブラーフマナたちから大量の金を集めなくてはなりませんでした。博識なブラーフマナたちは、マハーラーヂャ・マルツタから与えられた金の荷物すべてを運び出すことができず、その大部分を残していきました。そして、マハーラーヂャ・マルツタも、慈善として差し出したその大量の金を回収することはありませんでした。また儀式に使われたあとゴミとして捨てられていた金の皿や道具は、マハーラーヂ・ユディシュティラが自分が使うために集めるまで長くそのままの状態に放っておかれていました。そこで主シュリー・クリシュナは、マハーラーヂ・ユディシュティラの弟たちに、だれも所有権を主張していないその財産を回収するよう助言しました。もともとユディシュティラ王の財産だったからです。さらに驚くべきことに、国民のだれ一人として、持ち主のいない金を産業発展のために使おうとしていません。これは、だれもが十分な生活必需品をそなえ、不要な産業や事業を始めて物欲を満たすつもりがなかったことを物語っています。マハーラーヂ・ユディシュティラも、歴大な金を回収して人格主神、至高主ハリを満足させる供儀祭を執行しようとしていました。こうした目的がなければ、国の財源としてそのような金を集める望みはなかったのです。

マハーラーヂ・ユディシュティラの行動から学ぶべきことがあります。ユディシュティラ王は戦場で犯した罪を恐れ、そのために至高の権威者を満足させたいと考えました。これは、日々の生活で職務をはたしながら知らず知らずのうちに罪を犯しているということであり、意図していない罪を相殺するためにも、啓示経典に勧められている供儀を執行しなくてはならない、ということです。主は『バガヴァッド・ギーター』(第3章・第9節)で、*yajñārthāt karmaṇo 'nyatra loko 'yam karma-bandhanaḥ* (ヤギャールタハートウ カルマノー ニャトウラ ローコー ヤンム カルマ・バンダハナハ)「権威のない活動から生じる反動をすべて取りのぞくために、経典が勧める儀式を行なわなくてはならない」と述べています。そして、あらゆる罪の反動を避けることができるのです。興味や快樂のおもむくままに生きる人は、罪ゆえに発生する試練を受けなくてはなりません。ですから、儀式をするもっとも大切な目的は至高人格者ハリを満足させることにあります。その方法は時間・場所・人に応じて異なっても、目的はただ1つ、至高主ハリを満足させることしかありません。それが敬虔な生活であり、全世界に平和と繁栄をもたらす方法です。マハーラーヂ・ユディシュティラは、世界を治める理想的で敬虔な国王として、そのすべてをはたしたのでした。

マハーラーヂ・ユディシュティラが国王の義務として、人や動物の殺害が正当化される国政を毎日執行することで「罪人」になる、と仮定したら、至高主を喜ばず儀式をするはずのない、そして訓練も受けていないカリ・ユガの人々がどれほどの罪を意識的・無意識に犯しているか、たやすく想像できます。ですから『シュリーマド・バーガヴァタム』(第1編・

第2章・第13節)は、人類の主要な義務は、定められた本務をはたすことで至高主を満足させることにある、と述べています。

どんな場所、社会、階級、信条の人間であっても、さまざまな場所、時代、人のために経典が勧める儀式をしなくてはなりません。ヴェーダ経典(『シュリーマド・バーガヴァタム』第3編・第31章・第1節)では、*kīrtanād eva kṛṣṇasya mukta-saṅgaḥ param vrajet* (キールタナードウ エーヴァ クリシュナッシャ ムクタ・サンガハ パランム ヴラジェートツ)「カリ・ユガの人々は、クリシュナの聖なる名前を冒瀆することなく唱え、主を讃えなくてはならない」と勧められています。そうすればあらゆる罪から解放され、ふるさとへ、神の元へ帰るという至上の完成に到達することができます。筆写はそのことをこの偉大な書物のさまざまな箇所でも述べ、とくに主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブの生涯を概説するところで触れましたが、社会に平和と繁栄をもたらすために、同じ教えを繰り返して説明しています。

主は、私たち献愛者の奉仕に満足することを『バガヴァッド・ギーター』で公に宣言し、またその同じ方法が主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブの生涯と布教活動をとおしてしめされています。至高主ハリ(すべての苦しみから私たちを解放させる方、人格主神)を喜ばせるヤギヤ・儀式を執行する完璧な方法は、争いと意見の衝突に満ちたこの暗黒の時代に降誕した主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブの方法に従うことにあります。

マハーラージ・ユディシュティラは、すべてが揃っていた時代に馬の供儀祭の道具を確保するために大量の金を集める必要がありましたが、すべてが不足し、金もほとんどない現代にそのようなヤギヤができるわけがありません。いまは、くず同然の紙幣の山を持たされ、やがて景気が良くなればそれが金に変わると約束されている時代ですが、マハーラージ・ユディシュティラが費やした富に匹敵する富は、個人でも集団でも、あるいは国でも用意することはできません。ですから現代にふさわしい方法は、シャーストラにもとづいて主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブが勧めた方法です。費用はいっさいかかりませんし、しかもヤギヤの執行という高くつく方法よりもすばらしい恩恵を授かることができるのです。

ヴェーダの原則にもとづいておこなわれる馬や牛の供儀祭は、動物を殺す手段と誤解されはなりません。ヤギヤで捧げられた動物は、ヴェーダ聖歌の吟唱という超越的な力によって新しい生涯を与えられ、若返ることができます。その吟唱がもたらすものは、適切になされれば俗人が考えるものとはまったく違っています。ヴェーダ・マントラはすべて実用的であり、捧げられた動物が若返ることがその証拠です。

現代の名前だけのブラーフマナや僧侶がヴェーダ聖歌を唱えても、正しい方法に沿った唱名にはありません。正しい訓練を受けていない再誕の家庭の子孫は、本来のブラーフマナとはかけはなれ、かれらはシュードラ、すなわち「1回だけの誕生をする人間」と呼ばれています。1回誕生しただけの人にヴェーダ聖歌を唱える資格はなく、かれらが根源のマントラを唱えても実益は得られません。

主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブはかれらを救うために、サンキールタン運動、すなわちすべての実益を満たすヤギヤを提唱しています。そして現代人は、この確実かつ承認された道に従うよう強く勧められているのです。

第35節

आहूतो भगवान् राज्ञा याजयित्वा द्विजैर्नृपम् ।
उवास कतिचिन्मासान् सुहृदां प्रियकाम्यया ॥ ३५ ॥

アーフートー バハガヴァーン ラーギャー
āhūto bhagavān rājñā

ヤージャイトウヴァー ドウヴィジャイル ヌリパンム
yājayitvā dvijair nṛpam

ウヴァーサ カティチンム マーサーン
uvāsa katicin māsān

スフリダーンム プリヤ・カーミャヤー
suhṛdām priya-kāmyayā

āhūtaḥ—～に呼ばれて; *bhagavān*—主クリシュナ、人格主神; *rājñā*—王によって; *yājayitvā*—執行させること; *dvijaiḥ*—博識なブラーフマナ達によって; *nṛpam*—王に代わって; *uvāsa*—住んだ; *katicin*—2、3の; *māsān*—月; *suhṛdām*—親族のために; *priya-kāmyayā*—喜びのために。

主シュリー・クリシュナ、人格主神はマハーラージ・ユディシュティラがおこなう供儀祭に招かれ、十分に資格をそなえた（再誕者の）ブラーフマナたちによって儀式が執行されるよう監督した。そのあと、親族たちを満足させるために数ヶ月その地にとどまった。

要旨解説

主シュリー・クリシュナは、ヤギヤ執行の監督を見守るようマハーラージ・ユディシュティラに招かれ、年長のいとこの命令に従い、ヤギヤが博識な再誕のブラーフマナたちになされるよう指導しました。ブラーフマナの家族に誕生したからヤギヤを執行する資格がある、というわけではありません。適切な訓練を受け、真正なアーチャーリャからの入門式を受ける必要があるのです。ブラーフマナの家庭に生まれた1回の誕生の子孫は、1回誕生したシュードラと同じであり、そのようなブラフマ・バンドウ (*brahma-bandhu*) 「1回誕生の資格のない子孫」が宗教やヴェーダの行事にかかわることは禁止されています。主シュリー・クリシュナはこの条件が満たされるよう世話役の依頼を受けましたが、完璧な主は、その供儀祭が真正な再誕のブラーフマナたちによって首尾良く執行されるよう導きました。

第36節

ततो राज्ञाभ्यनुज्ञातः कृष्णया सह बन्धुभिः ।
ययौ द्वारवतीं ब्रह्मन् सार्जुनो यदुभिवृतः ॥ ३६ ॥

タトー ラーギヤービヤヌギヤータハ
tato rājñābhyanujñātaḥ

クリシュナヤー サハ・バンドフウビヒヒ
kṛṣṇayā saha-bandhubhiḥ

ヤヤウ ドウヴァーラヴァティーンム プラフマン
yayau dvāravatīm brahman

サールジュノー ヤドゥビヒル ヴリタハ
sārjuno yadubhir vṛtaḥ

tataḥ—その後; *rājñā*—王によって; *abhyanujñātaḥ*—許されて; *kṛṣṇayā*—またドウラウパディーによって; *saha*—~と一緒に; *bandhubhiḥ*—他の親族達; *yayau*—~に行った; *dvāravatīm*—ドウヴァーラカーダーマ; *brahman*—ブラーフマナ達よ; *sa-arjunaḥ*—アルジュナと共に; *yadubhiḥ*—ヤドゥ王家の人々によって; *vṛtaḥ*—囲まれて。

シャウナカよ。主はそのあと、ユディシュティラ王、ドウラウパディー、他の親族たちに別れを告げ、アルジュナやヤドゥ王家の人々をともなってドウヴァーラカーの都市に向かった。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第12章、「パリークシット皇帝の誕生」の要旨解説を終了します。